

2024 年度
調査報告書

2023-2024シリーズセミナー
誰が子どものスポーツをささえるのか？

目次

はじめに	1
1. シリーズセミナー「誰が子どものスポーツをささえるのか？」	2
第1回「子どものスポーツへの保護者の関わり」	2
第2回「＜女子マネ＞と母親の役割の共通項」	6
第3回「子どものスポーツ離れを食い止める」	10
第4回「『子どもを成長させる大人』五つの条件」	14
2. クラブチーム取材	18
浜松アークスピリッツ	22
北摂ベースボールアカデミー	26
浜北太陽野球スポーツ少年団	30
ジュニア・エンジョイ・ベースボール・コミュニティ(JEBC)	34
3. セミナーのまとめと考察	40
参考文献	42

はじめに

本報告書は、2023 年 7 月から 2024 年 5 月に開催されたシリーズセミナー「誰が子どものスポーツをささえるのか？」に基づいて作成している。笹川スポーツ財団では 2016 年から、小学生の母親を対象とした「小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究」を実施してきた。調査からは、以下の点が明らかにされている。

第一に、競技そのものに直接関わらない、子どもたちの世話などの役割を母親が担って「ささえる」ことで、子どもは習いごとやクラブチームなどの組織的なスポーツに参加できている。2021 年の調査結果では、家庭内で子どもの送迎やスポーツ用品の購入に関わる頻度は、父親よりも母親のほうが圧倒的に高かった。また、チーム内での「お茶当番」や指導者・保護者間の情報共有も、主に母親が担う状況が示された。

第二に、その役割をめぐって多くの母親が葛藤している。インタビュー調査では、特にチーム内での役割に関して、長時間の拘束や理不尽な係の押し付け、保護者同士の人間関係など、さまざまな悩みが吐露されている。それでも「子どものため」と我慢しながら関わり続ける保護者も少なくない。少数ではあるが、うつ状態になる保護者の話も聞く。

第三に、「ささえる」ことが難しい家庭の子どもは、組織的なスポーツから離れる可能性がある。調査結果では、スポーツ活動に参加しない理由として約 4～5 割の母親が「送迎や付き添いの負担が大きい」「保護者の係や当番の負担が大きい」「保護者どうしの人間関係に気を使いそう」という項目を選択し、これらの回答には世帯年収との相関がみられた。つまり、母親自身の負担感からスポーツ活動への参加を控えるケースは、母親の意識の問題だけではなく、家庭の経済状況や余裕度も関連していると考えられる。

以上の結果はメディアにも取り上げられ、当事者である母親をはじめ、この状況に関心を寄せる多くの方々から賛同の声が届いた。一方で、「課題は理解できたが、具体的にどうすればよいのか」「母親が担わないのであれば、誰がやるのか」という疑問の声もあがった。

しかし、この問題に特効薬のような解決策はないと考える。スポーツの課題と社会全体のジェンダーや子育ての課題が交差する複雑な問題であり、最終的にはそれぞれの現場に適した解決策を模索するしかない。それでも当財団の問題意識にとどめることなく、複数の方の知見や考えを共有し、実践や研究を通して改善につなげることはできないか。そのような思いから、本シリーズセミナーを開催した。第 1 回と第 2 回では研究者の方々に、なぜ母親は大変な状況に置かれているのか、国際比較やジェンダーの視点から講じていただいた。第 3 回と第 4 回では具体的な解決策に焦点をあて、近年新しく立ち上がったチームの仕組みや、子どもや保護者との向き合い方について紹介いただいた。セミナーには事務局の想定を上回る多くの方々にご参加いただき、終了後にも複数のクラブからご連絡をいただいた。一部のクラブへの取材内容を 2 章にまとめている。

今もなお、つらい経験を語る保護者が後を絶たない。しかし、子どもも保護者も共にスポーツを楽しめる環境や、理不尽な状況を「理不尽だ」と指摘できる風土は、確実に広がりつつある。子どものスポーツの選択肢をさらに広げ、適切な情報を届けることが、スポーツ関係者に求められる役割である。本書がその一助になれば幸いである。

2023-2024 シリーズセミナー 誰が子どものスポーツをささえるのか？ コーディネーター
笹川スポーツ財団 宮本幸子

1. シリーズセミナー「誰が子どものスポーツをささえるのか？」

第 1 回

子どものスポーツへの保護者の関わり

—ジェンダーと国際比較の観点から—

講師: 岡田 千あき 氏

(大阪大学大学院人間科学研究科 教授)

2023 年 7 月 31 日(月) 19:00~20:30 開催

主な講義内容

1. ジェンダーの観点から

誰が子どものスポーツをささえるのか—日本には特有の「ささえる」形があった。しかし、社会変化の中で形態が変わりつつある。

日本特有のささえ方のひとつが「お茶当番」である。2021 年に書いた論文¹⁾で、「日本はジェンダーギャップ指数(GGI)の順位が低く、スポーツでもさまざまな場面で色濃く表れている。スポーツ界自体が変わる必要もある」という指摘をした。具体的には学校の部活動、女子マネジャー、お茶当番、フィールドの聖域化(女性が入れない甲子園や大相撲)を取り上げた。論文に対して多くの反響があり、お茶当番に関しては、「子どものスポーツに女性がかかわる時に、父親の顔は見えてこない。パートナーはどうしているのか？」という質問が多く寄せられた。また、「男性は、自分のパートナーがこのような仕事をたくさんさせられる状況で、何も文句を言わないのか？」と聞かれ、海外ならではの考え方だと感じた。

お茶当番の何が問題なのか。子どものスポーツをささえたい人が自主的にささえるならば問題ないが、親の役割や女性・男性の役割を、常識のように決めつけられたり、他者から押し付けられたりする状況には問題があるのではないか。「スタメン問題」として取り上げる研究者もいるが、現場では、頻繁に手伝いに来てくれる保護者の子どもを試合

に出場させたいと考える指導者は一定数みられるのが実情だ。同じぐらいの競技レベルの子どもが複数いる場合、熱心に見にくる親、指導者がよく知る親の子どもを優先させたいという、人情のような心理が働くのかもしれない。

また、お茶当番の話をする時には「同調圧力」という言葉がよく出てくるが、必ずしも日本特有ではない。ただ海外では、保護者の「自分は同調圧力(ピアプレッシャー)を受けている」という認知が非常に高い印象だ。日本の保護者は、自分が置かれた状況が分からずにストレスを感じる、「自分のわがままかもしれない」と思うのが特徴である。

1) Chiaki Okada, 2021, “Can overcoming issues of gender be an Olympic legacy (Commentary): a need for comprehensive change,” *Sport in Society*, 26(1): 147-53.

2. 国際比較の観点から

ここからは、さまざまな国や地域でみてきた子どものスポーツについてお話したい。

(1) オランダ

—UNICEF 子どもの幸福度ランキング 1 位—

人々がスポーツに関わる時間も長く、複数のクラブチームに所属する人も珍しくない。「半官半民」でクラブチームにも公的な資金がかなり使われて

いる。たとえばサッカーなら、大きな市であれば市内でレベル別に 10 部ぐらいのリーグがあり、本気で取り組みたい人からのんびり楽しみたい人まで、スポーツへの関わり方も選択することができる。一方で若者の地元のクラブチーム離れという課題もみられ、「地域ぐるみは今の時代にあっていない」という声も聞く。

(2) 香港

—1国2制度、アジアでありながら欧州の文化—

子どもが中学生になるまでは、外出時には必ず大人が付き添うことが法律で決められている。同じ状況は欧米のいくつかの国でもみられ、スポーツにも親が必ず付き添うので、保護者の負担はある。ただ、そこに同調圧力や必須の当番があるわけではなく、親は親同士でゆるいつながりをつくるようだ。

(3) カンボジア

—経済成長著しい東南アジアの新興国—

経済成長が進み、子どものスポーツの機会も急速に増加している。ただし、ささえる大人の世代は、子どもの頃にあまりスポーツの経験がない。そのため、クラブ運営が不安定である、コーチや審判のレベルが低いなどの課題がみられる。一方で、先進的な取り組みや海外の援助を積極的に取り入れ、政府も代表チームを直接支援している。スポ

ーツが経済成長の中のひとつとして機能してきた事例といえる。

(4) タンザニア

—地域差、民族差、宗教差が大きい—

1970 年代まで社会主義で、スポーツが非常に盛んであった。しかし政府が予算を削減し、学校における体育やスポーツがなくなってしまった。首都ではスポーツの機会が市場に委ねられたが、それ以外の地域におけるスポーツの機会は、壊滅的に、一気に失われてしまった。2000 年代に入り復活の兆しはみられるが、女性、障害者、地方のスポーツの切り捨てが懸念されている。女子の早期結婚・妊娠が非常に多いため、国際協力機構 (JICA) が政府と協力して「スポーツを通じた女性のエンパワメント」に関わる事業を行っている。

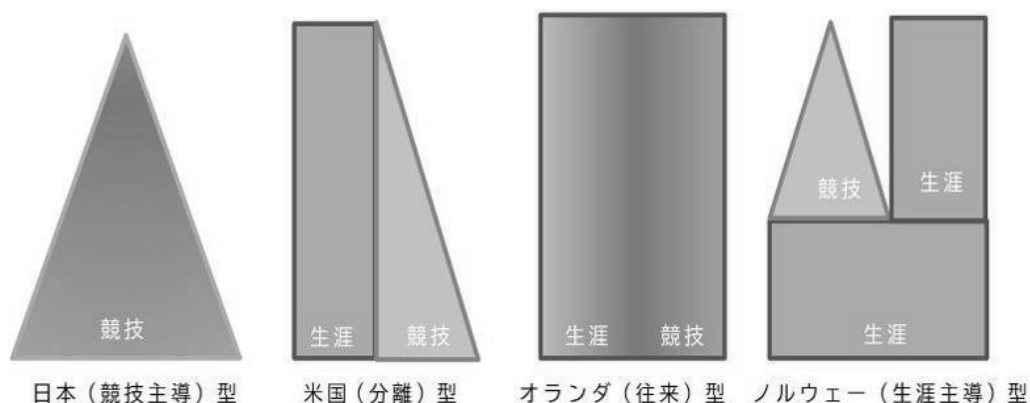
3. 競技スポーツと生涯スポーツ(楽しむスポーツ)の関係性

さまざまな国の状況をもとに、図表 1-1 を作成した。図は上に行くほど年齢が上がり、横幅が広いほどスポーツ人口が多い様子を示す。

(1) 日本型(競技主導型)

基本的には子どもの頃に競技主導で取り組み始めることが多く、どうしても年齢が上がるにつれて参加者の数が減少する。

図表 1-1 競技スポーツと生涯スポーツ(楽しむスポーツ)の関係性



注)講師が本講演のために作成した図であり、学術研究の成果としては今後修正を要するものとしてご覧いただきたい。

(2) アメリカ型(分離型)

比較的明確に、競技スポーツと楽しむスポーツとが分かれている。競技スポーツには「セクション」があり、「トラベルスポーツ」といわれるように、遠方の強いチームと試合をしたりするので、親の関わりも多くお金もかかる。一方、各地域でクラブチームやYMCAなどが楽しむスポーツの場も提供しており、子どもたちにとっては選択肢があるといえる。

(3) オランダ型(往來型)

オランダについては理解するのが非常に難しい。「グレイゾーン」も広く、大人になってからでも競技スポーツと楽しむスポーツの行き来ができる。

(4) ノルウェー型(生涯主導型)

多くの種目において、12歳までは記録を残さず、順位をつけないのが特徴である。楽しむスポーツというベースを作った上で、競技力を向上させた人と、生涯スポーツとして続ける人に分かれる。

競技スポーツと生涯スポーツの関係性にはさまざまなパターンがある。この分類がすべてではなく、「このパターンならすべてがうまくいく」ということもない。競技性との兼ね合いや国民性なども関係するかもしれず、さまざまな模索をする必要がある。

4. まとめ

—誰が子どものスポーツをささえるのか?—

保護者がささえるのがよい/悪いということではなく、課題を整理する必要がある。課題の整理と改善ができれば、ささえる人たちはまだいると思う。保護者以外のアクター(学校や個人、企業や大学など)が少しずつキャパシティを増やしていくことができれば、過度な負担にならずにささえることができるだろう。

また、政府の役割の明確化も重要だ。どこまで市場に委ねるかの議論は難しいが、方針があると

皆が動きやすいとは思ふ。さらにいえば、「そもそも私たちはスポーツに何を求めるのか?」これも人によって、地域によって、時代によって異なると思うので、ぜひ議論したい。

質疑応答

Q 4 類型の図について、年齢の上限は何歳ぐらいまでをイメージしているのか。競技スポーツと生涯スポーツの関係性について、もう少し詳しく聞きたい。

A 「体が動く間」「スポーツをしたい間」の年齢をイメージして作成した。ただ種目によっても異なるだろうし、日本が必ずしもすべて「競技主導」と言い切れない部分もあるだろう。

「日本は今の型を崩して新しいものを作ろう」「日本もオランダ型にしよう」という考え方ではなく、「下にもうひとつ加えよう」「横に分割しよう」など、何か変えることで、もう少し楽しくたくさんの人が考えられる方法があるのではないか—そのような意図でこの図を作成した。

Q 4 類型は保護者の関わり方と関係があるのか。

A 競技主導型では、楽しむスポーツに関わりたい保護者は関わるできない。ノルウェー型(生涯主導型)の場合は、よくも悪くも国がある程度の規制をするので、子どもが小さいうちは練習時間や出場機会が制限され、親の関わりも規定される。アメリカ型(分離型)は生涯スポーツと競技スポーツの行き来ができないため、「セクション」に受かるための指導にお金がかかるという話はよく聞く。

Q この先、日本の手本になる国はどこなのか。

A いずれの類型も一長一短だと思う。私たちがスポーツに何を求めるのか、さまざまなパターンがあるということを議論して、できるだけたくさんの人が、できるだけスポーツを楽しめるような方法を考えるプロセスが重要ではないか。

Q スポーツ(種目)によって競技スポーツと生涯スポーツの図は変わるのか。参照された特定のスポーツや政策があれば知りたい。

A 変わると思う。以前から、日本のスイミングスクールの仕組みに注目している。競技スポーツと生涯スポーツの両方をカバーし、スイミングスクールで育った選手が国際大会でメダルを獲得している。一方で、たくさんの幼児や高齢者もさまざまな目的でスクールに通っており、まさに「老若男女」といえる。

スクールでは段階を追って指導が行われ、4 種目をきちんと泳げない限りスピードは求められず、自分のペースで上達していく。すべての地域ではないもののスクールバスがあり、親は「見学スペース」での観覧のみの関わりというところが多い。施設維持の負担は大きいはずだが、ほかの習いごとと比較して極端に高額ではない(コーチの過重労働にささえられている部分があり、必ずしもよいとはいえない場合もある)。ほかのスポーツがスイミングスクールの仕組みに倣うところがあると思う。



岡田 千あき 氏

神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士後期課程修了。博士(学術)。

主な研究分野は、スポーツを通じた開発と平和、生涯スポーツ、スポーツ教育学。

国際協力論文コンテストにおいて外務大臣奨励賞。

青年海外協力隊(ジンバブエ)、大阪外国語大学外国語学部助手、講師、准教授を経て現職。

主な著書に、「スポーツで蒔く平和の種 紛争・難民・平和構築」(阪大リーブル)など。

Q 息子が小中高と硬式野球をしているが、主体性とはかけ離れた世界で、指導者と選手・保護者の考え方の溝が深まるばかりだ。どうすればお互いが心地よくささえられるのか。

A 指導者の考え方を変えてもらうしかないと思う。今夏の甲子園では変化の兆しも見えたが、いまだに指導者と選手・保護者の関係に上下があるチームがほとんどだ。そのような中で選手や保護者にできることは、チームを選ぶこと、合わないと思ったらチームを移ることはないだろうか。残念な回答にはなるが、「主体性とはかけ離れた世界」が伝統的に続いている場合、個人や数名の力ではなかなか変えられないだろう。

甲子園でみられたような、選手がいきいきとプレーする、そのための指導者と選手の、規律を保った上でのフラットな関係性が多くのチームに広がればよいと思う。「それでも勝てる！」あるいは「それでないと勝てない！」ことが示されて、旧態依然としたチームや指導者が変わってくれるとよいと思う。

第

2

回

〈女子マネ〉と母親の役割の共通項

—女性がスポーツを「ささえる」視点から—

講師:関 めぐみ 氏

(甲南大学文学部社会学科 講師)

2023 年 9 月 13 日(水) 19:00~20:30 開催

主な講義内容

1. はじめに—誰がささえているのか—

子どものスポーツを「ささえる」人について、図表 1-2 にまとめた。未就学児や小学生は、地域の運営スタッフや保護者がささえる。中高生は主に部活動で、教員や学生スタッフがささえる。大学の部活動では、OB が中心と思われる社会人スタッフと学生スタッフがささえている。

本日の話では、運営スタッフや教員・社会人スタッフというメインでささえる人たちを、さらにその下からささえる「保護者の中の母親」と「学生スタッフの中の女子マネージャー」の共通項を探りたい。

2. 〈女子マネ〉研究からみる「ささえる」役割

女子マネージャーに関する具体的な研究として、日本における X 大学・Y 大学、およびカナダの Z 大学において、フィールドワークやイ

ンタビューを実施してきた¹⁾。カナダの Z 大学の部活では、たとえば「ストレンクス・アンド・コンディショニングコーチ」(怪我をしない体づくりの指導)、「スタッフセラピスト」(怪我への対処)、「ビデオコーディネーター」(動画撮影)、ほかにも栄養担当、道具担当、採用担当、勉強担当などの仕事があり、主には有償で社会人が担っていた。対して日本の大学の部活では、それらの役割を女子マネージャーが無償で、むしろ部費を払いながら行っている。カナダの状況から考えると、日本の女子マネージャーの仕事には価値がある—すなわち組織運営に不可欠で、有償に値する仕事をしているといえる。

また、日本の女子マネージャーには、活動時間中にグラウンドで担う業務以外の「見えない仕事」が非常に多い。加えて「マネージャーはどのような仕事をしているのか分からない」「するのが当然だ」「自分で選択した」と思われて、階層的には下に位置づけられている場合もある。

1) 講師の女子マネージャーに関する研究の詳細は、以下を参照。

関めぐみ, 2018, 『〈女子マネ〉のエスノグラフィ

「子ども」のスポーツを「ささえる」人

「子ども」段階	未就学児・小学生	中学生・高校生	大学生
活動の場	地域	学校	学校
「ささえる」人	運営スタッフ	教員	社会人スタッフ
	保護者	学生スタッフ	学生スタッフ

母親

共通項?

〈女子マネ〉

図表 1-2 「子ども」のスポーツを「ささえる」人

一:大学運動部における男同士の絆と性差別』
晃洋書房。

関めぐみ,2023,「大学運動部活動の学生スタッフのための Institutional Ethnography(1):経験記述から見える組織の一員としての「女子マネージャー」」甲南大學紀要文学編 173,pp.109-121.

3. 〈女子マネ〉と母親の役割の共通項

—性別分業—

女子マネージャーと母親の役割との共通項は、マネージャーという立場、保護者という立場でありながら、男性か女性かで役割が異なる「性別分業」だと考える。性別分業とは「男性が賃労働、女性が家庭のケア労働を担う近代社会における分業をさす」(山根 2010、p.34)が、そこで想定されるのは対等な関係ではなく、「権力の差がある」関係である。

女性がケア労働²⁾をする理由を、山根(2010)は「女性だから他者のニーズを重視しているのではなく、ケア責任を委ねられている行為者であるからこそ他者のニーズを考慮し、またそこに自分の人生の意味を見つけ出そうとしている」(p.302)ためと指摘する。女子マネージャーも、多くは勧誘をきっかけに入部する。ケアの役割を期待され、「お願いされているし、やってみようかな」という気持ちで関わる例が多かった。

女性がスポーツをささえる理由も、山根の指摘する「(女性が)ケア責任を委ねられている行為者であるから」、端的に言えば女性であるために「あなたがするのは当然でしょ？」という考え方でケア責任が委ねられているからではないか。また、女性が「する」スポーツから離れている実態や、男性の有償労働時間の長さも背景として指摘できる。加えて、そもそものスポ

ーツ組織が、誰かが無償でささえなければ成り立たない制度設計であることも問題だと考える。これをどのように変えていくかがポイントではないだろうか。

2)「ケア労働」という言葉は、本来は看護・介護・育児など、必要なニーズが満たされない立場の人をサポートするという意味で使われる。本講演では、健康な大人をささえるのに「ケア労働」という言葉が適切かという是非も踏まえた上で使用している。

4. おわりに—誰がささえるのか—

ケア労働に関して清水(2022)は「誰かが担わなければならない重要なものであるにもかかわらず、私たちの社会はケア労働の価値を正當に認め、ケアをする人に敬意を払って労働に見合った報酬を支払う、ということをしてこなかった」(pp.114~115)と指摘する。ケアすることへの正當な評価や対等な扱いがなく、一段下に置かれることが問題ではないだろうか。

その状況を変えるために、まず身近なところでは、ささえる人の困っている声に耳を傾けることが重要だ。その時に「女性だから」「母親だから」という「役割」ではなく、何をしなければならないかという「仕事」をリストアップして、誰がどこまで担えるかを考える。そのためには、心理的安全性が担保された組織で、個人が声をあげられる仕組みや環境を整備する必要がある。

誰が子どものスポーツをささえるのか—結局、一人ひとりができることをやるしかないが、それが女性に偏るのは問題ではないか。女性がスポーツをささえることを見込んだ制度設計や、階層的に下位に位置づけられている問題で困っている人がいるのであれば、変えたほう

がよい。

何より大事なものは、「する」人と「ささえる」人の双方にとって、安全・安心な場を確保することである。ガイドラインや法律の制定によって安全を確保すると同時に、種目や競技レベル、地域性などによっても異なる多様な人のニーズをどこまで満たすのかを考えて、個別具体的な考察を深めていく。その二本柱で、それぞれの立場で、「誰が子どものスポーツをささえるのか」を考えることが重要ではないか。

参考文献

清水晶子, 2022, 『フェミニズムってなんですか?』文藝春秋。

山根純佳, 2010, 『なぜ女性はケア労働をするのか: 性別分業の再生産を超えて』勁草書房。

質疑応答

Q 女子マネージャーや母親の競技に対する理解力が高かったら、選手たちは階層的に下にはみないのではないだろうか。

A 女子マネージャーはたくさん勉強しても、実際に競技をしている選手とは同じ経験ができない。競技に対する理解力は上がっても、選手たちのように練習後も長い時間携われない状況では、選手から「理解力が高い」とみなされることはなかなか難しいのではないか。同じことを母親に要求するのはさらに難しい。

ささえる人に何かを求めるよりも大事なことは、ささえられている選手が、自分がささえられていることを理解して自分の行動を考えることではないだろうか。

Q 女子マネージャーの希望者が増えているように思うが、なぜだろうか。

A そもそもマネージャーの研究は非常に少なく、全国調査が行われていないため、「増えている」といえるのかわからない状況である。まずは全国の中学校・高校・大学に、マネージャーや学生スタッフがどれくらいいるのか、その実態や推移を知るための調査をする必要がある。

また実際に「増えている」のだとすると、男女で「する」「見る」「ささえる」が平等に選択できるようになっているのかを考える必要がある。スポーツを「する」と「見る」「ささえる」とは大きく異なる。女性に「する」選択肢よりも「ささえる」選択肢が用意されているのであれば不公平だ。「する」権利が皆に平等に与えられるべきで、そのような観点もふまえて、なぜ「ささえる」を希望する女性が増えているのかを考えたい。

Q 女子マネージャーの仕事の内容がきちんと定まっていないことが課題だと思う。組織図においてマネージャーが雑用係ではない位置づけにされているチームはあるのか。

A マネージャーが増えすぎて、やらなくてもよい仕事や選手がやるべきことまで行っている実態はある。各チームで、どのような仕事が本当に必要で、それに対してマネージャーは何人必要かを考えるべきだと思う。

調査をした部活では、トレーナーやアナライジングスタッフなどは組織的にも明確な位置づけをされていたが、雑用係の多くの部分はマネージャーの仕事になっているのが現状だ。また、あるマネージャーが、グラウンドでやることなく、仕事ではないもののボールを拾っていた。最初は選手から「ありがとう」と言われたが、続けるうちにやらないと責められるようになった。つまり、ケアの要求レベルが上がり、仕事が無限に増えていく。マネージャーがどこま

すべきなのか、非常に難しい問題である。

という。

Q 女子マネージャーはいつ、どの種目のどのような場面で誕生したのか。テクニカルやフィジカルなど、明確な役割の必要性が生じ誕生したのか。

A 女子マネージャーの歴史については、高井昌吏先生が2005年に出版された本³⁾に詳しく書かれている。高校野球の内容を中心にまとめているその本によると、かつて男子運動部には男子マネージャーしか存在しなかったが、高度経済成長期の1960年代頃に女子が参入していくようになった。それは、大学受験が激化する中で選手の数が減り、男子マネージャーが選手として駆り出されたことで、マネージャーが不足したからである。しかし、女子が担ったのは、男子マネージャーが担っていた監督やコーチのような役割ではなく、雑用および洗濯や食事作りといった女子用の役割であった

3)高井昌吏,2005,『女子マネージャーの誕生とメディア:スポーツ文化におけるジェンダー形成』ミネルヴァ書房.

Q 24 時間スポーツのことだけを考えてやり続けるのが大学スポーツ(アメフト)で、そのために献身的なマネージャーが必要とされる構造自体が日本的なのか、それともカナダを含む世界でも同レベルなのか。

A カナダやアメリカの大学では、国レベルで練習可能な期間や時間が設定されており、長期間・長時間練習することができないようになっている。また、脳震盪を起こす可能性のある接触する練習も厳しく制限されている。そのため、日本とは構造が異なり、サポートスタッフの関わりも異なっているといえる。



関 めぐみ氏

大阪府立大学大学院人間社会学研究科博士後期課程修了。博士(人間科学)。専門は社会学、ジェンダー／セクシュアリティ論。京都光華女子大学女性キャリア開発研究センター助教を経て、2020年4月より現職(セミナー後の2024年より甲南大学文学部社会学科准教授)。
2017年と2023年に日本スポーツとジェンダー学会学会賞(論文賞)を受賞。主な著書に、『〈女子マネ〉のエスノグラフィー:大学運動部における男同士の絆と性差別』(晃洋書房)など。

第 3 回

子どものスポーツ離れを食い止める

—保護者の負担がない少年野球チーム作りから学ぶ—

講師:中桐 悟 氏

(練馬アークス・ジュニア・ベースボールクラブ 代表)

2023 年 11 月 29 日(水) 19:00~20:30 開催

主な講義内容

1. 練馬アークス・ジュニア・ベースボールクラブ チーム紹介

クラブは 2021 年 4 月に設立され、現在は小学 1 年生から 6 年生まで約 40 人が在籍している。東京都練馬区・板橋区にある城北中央公園をメインの活動拠点としており、会費は月に 7,300 円、活動日は週に 1 回、活動時間は 1 回あたり 3~4 時間である。活動時間に関しては、春日学園少年野球クラブ(つくば市)代表 岡本嘉一氏が提唱する「週末 1/4(土日を土曜日の午前・午後、日曜日の午前・午後に 4 分割して捉え、週末の 4 分の 1 を野球にあてる)」という考え方を採用している。試合に関しては、「PCG(PLAYERS CENTERED GAMES) 東京」というリーグに所属している。チームとしては「怒声・罵声の禁止」「育成重視」を標榜し、勝利至上主義にならず、野球を好きになって続けてもらうことを一番のポリシーとしている。また、全日本軟式野球連盟(全軟連)には所属せず独立性を担保したチームである。

チームスタッフには、コーチ、トレーナー、看護師や医療系の有資格者、元プロ野球選手、教員志望や医学部の学生などがいる。それぞれの得意分野を活かしスキルを補完し合いながら、子どもたちの成長を促していく体制が練馬アークスの特徴である。一般的な学童野球

チームよりも年会費が高い分、それに見合ったサポートを提供している。

子どもが楽しく気軽に野球ができるチームにしたいとの考えから保護者の業務負担をなくしており、既存のチーム運営のあり方を否定するものではない。現在チームは多方面から評価いただき、遠方から参加しているメンバーも多い。

2. 保護者の業務負担をなくした方法

チーム運営の基本的な考え方は、無駄なタスクは行わず、必要なタスクはチームのスタッフが担うか外注する。少年野球で保護者の役割になることの多い内容について、どのように対応しているのか順番に紹介する。

「お茶当番」は各自が水筒を持参するため不要と判断した。「怪我等の手当て」は、柔道整復師や看護師の資格を持つスタッフが対応している。「練習補助」は基本的にコーチが担当する。保護者には一切強制はしないが、子どもと一緒に野球を楽しむという観点で、希望する方にはキャッチボールの相手や練習への参加をしてもらっている。「審判」は外部の審判協会をお願いしている。

「広報(SNS、HP)」「活動場所の確保」は私が担当する。「集金」はクレジットカード払いにし、

「情報伝達」は LINE で行う。「配車」(チーム単位での移動のための運転)は、各自が現地集合・現地解散にすることで不要とした。ほかのチームでは「レクリエーション」(ハロウィーン、クリスマス、初詣等)が大変という声も聞かれるが、練馬アークスでは野球と直接関係ないことはやらないというコンセプトで実施していない。

必要なタスクに関してはITを活用し、いかに効率化するかを考えた。たとえば「メンバー募集」は Google に広告を出し、「保護者との連絡手段」にはビジネス用の LINE を利用している。「保護者説明会」は定期的に保護者から質問や意見を募集し、回答した動画を YouTube で配信している。「会計管理」や「名簿管理」にはそれぞれソフトや管理ツールを導入した。「備品・ユニフォームの購入等」は非対面の EC サービスを利用し、「指導ツール」としてタブレットを活用、「指導者の自己研鑽」に関してはサブスクで専用ツールを導入するなど、IT をフル活用している。

3. 事前質問への回答

Q 負担を嫌がる保護者がいる一方で、熱心なあまり必要以上に介入する保護者も一定数いるのではないかと。

A 練馬アークスの場合は、チームの立ち上げ時から今のコンセプトを掲げて Web サイトにも詳細を掲載し、基本的にはそこに賛同する家庭が参加している。素晴らしい野球の経歴を持つ保護者もいるが、頼ってしまうと「保護者の業務的な負担一切なし」というコンセプトが瓦解するのではないかと懸念し、「関わってもらえる場合はお子様の卒業後に」と線引きをして案内している。

Q 勝利至上主義の否定を掲げた上で、チー

ムや子ども個人の目標をどのように設定しているのか。

A チームとしての目標はひとつで、「みんなで野球を楽しむ」である。「みんな」にはチームメートや試合相手、審判、コーチや指導スタッフも含む。「自分だけが楽しければいい」のではなく、「みんなで楽しむ」を実現するためにどのように行動するのがよいのか、我々も考えながら、普段から子どもたちに懸命に伝えている。

試合の成績などの目標設定はしないが、「野球が楽しいからチームでも家でもさらに練習をし、もっと野球がうまくなり、より楽しくなる」というよい循環がつくられている。練習については正直なところ、3〜4 時間では足りないと感じることもあるが、大人も子どもも「もっとやりたい」という気持ちがあるうちにやめておき、子どもの余力を残して能動的なアクションを促したほうがよいのではないかと、思う。

Q 指導者の募集をどのように行ったのか。

A クラブを立ち上げた際には、私から草野球で出会ったメンバーに声をかけていた。その後は直接 Web サイトからお問い合わせをいただき加入してもらった人もいる。

4. まとめ

最初に、新規で立ち上げるチームの運営のポイントや必要な支援に関してまとめる。第一に、都市部における活動場所の確保が大きなハードルであることを指摘したい。現状、週 1 回の活動場所は何とか確保できているものの、非常に苦勞しており、今のところ明確な打ち手はない。第二に、指導者のマッチングの課題を指摘したい。練馬アークスのコーチは月 1 回からの指導が認められ、謝礼も支払われる環境だからこそ関わることができていると思う。たと

えば部活動を引退した高校 3 年生、大学生、月に 1 回ぐらいの指導なら可能な社会人の副業としての指導者、退職したシニア、学校教員の経験者など、条件が合えば指導に携われる人は潜在的にはたくさんいる。そのような方々とチームがうまくマッチングできるようなプラットフォームがあると、子どもの野球をより活性化できるのではないかな。

次に、「子どものスポーツは誰がささえればよいのか」について述べたい。保護者だけでささえるのは現実的に難しい状況で、社会全体でささえることが不可欠である。野球では特に、子どもがやりたいと思っても親がさせられないという話をよく聞く。そこのハードルを下げて、野球に少しでも興味がある子どもを救う仕組みが必要である。日本野球機構(NPB)をはじめとして各競技団体が体験教室を開いているが、その次の受け皿がなく、いきなりチームへの加入となる。現状、その受け皿になっているのが練馬アークスだと思う。

また、野球をやるにはどうしてもお金がかかり、練馬アークスの場合は保護者に負担してもらっている。ただし、すべての地域やクラブにこのような方法がフィットするわけではなく、行政や企業などから資金の支援があればより社会全体でささえる構図が実現できるのではないかと、現場のひとつの意見として思う。

質疑応答

Q 試合(PCG 東京)について詳しく教えてほしい。

A PCG は、勝利至上主義ではなく「みんなが成長できるような楽しい野球をやろう」というコンセプトで立ち上げられたリーグである。勝敗を競うだけではなく、ベンチ入りのメンバーが

全員出場したら 1 ポイント、キャッチャーを 3 人以上代えたら 2 ポイントなど、いかにチーム全体で取り組めたかをポイント化する仕組みになっている。ベンチ入りの人数に制限はなく、試合はリーグ戦、学年ごとに投手の球数制限を設けている。

Q 都内の野球チームで、高学年になると受験のためにやめる子どもが多い。練馬アークスでもそのような傾向があるのか、受験との向き合い方を教えてほしい。

A 半分ぐらいは受験をすると聞いている。冬場になると 6 年生の参加頻度は少し減るが、最後まで辞めずに受験と両立する子もいる。活動日が週 1 回という点は、受験の観点でもよいと思う。活動を休むことが悪いとは思っていないので、ほかの用事で欠席や遅刻をするケースも認めている。

Q 指導者の研修について具体的に教えてほしい。

A コーチは基本的に全員が全日本野球協会(BFJ)の公認指導者資格を取るようにしている。そこで指導の^{ひょうそく}平仄を合わせておけば、コーチ間で指導が異なる状況は避けられると思う。加えて定期的にスタッフ間でミーティングを行い、指導方針の認識を合わせるようにしている。

Q プレーに関して怒声・罵声がないのは理解できるが、挨拶や礼儀、野球以外の行動(準備や片付けなど)について指導をする際も怒声・罵声はないのか。その場合、どのように指導をしているか。

A そもそも、いかなる指導をする局面においても怒声や罵声は一切必要ないと考えている。挨拶や礼儀については、諦めずに粘り強く重

要性を説明し続けており、ようやく段々とチーム全体でできるようになってきた。準備や片付けについても、あるべき姿を教えているが、そこに怒声や罵声は一切必要ない。小学生も立派な人間なので、普通に背景や意図を丁寧に説明すれば理解してくれる。

Q 中桐さんが別の地域に新たに同様のチームを立ち上げるならば、まず何から行動するか。

A 今のクラブを立ち上げた時と同様に、まずはチームのコンセプトを決め、ホームページを立ち上げる。ホームページができれば、もうチームは「できた」ということになる。意外に簡単にできる。ホームページをハブにしてそこに掲載されている理念に賛同する指導者や子どもたちが集まってくるイメージである。

Q ポジション、レギュラーなどどのように決めているのかを知りたい。

A 小学生のうちはポジションを固定せず、すべてのポジションが守れることを理想と考えているので、できるだけたくさんのポジションができるように指導しているが、投手、捕手、一塁手に関しては比較的「専門性が高いポジション」として、本人の希望および適性を考慮して決めている。全員試合に出ることが一つの目標なので、固定のレギュラーをしっかり決めてはいないが、試合に出られる時間の長さは、その

子の野球スキルやチームワークを考慮して総合的に判断する。

Q 今後、クラブを 5 年、10 年存続させるために、代表やコーチをどのように次の方に引き継ぐか、考えていたら教えてほしい。

※「後継者がいない」という質問が複数あった。

A 私は代表の立場だが、週 1 回だけの活動であることと、必ずしも代表が毎回練習に参加しないといけない決まりがあるわけでもないで、この先も社会の需要があれば、細く長く続けていけると考えている。コーチは年月が経過すれば入れ替わりがあると思うが、私は当クラブを卒業した子どもたちが将来大学生くらいになった時にコーチとして戻ってきてくれることを楽しみにしている。今から「練馬アークスで楽しい野球を教えてもらったので、僕も将来はこの楽しい野球を教える役割を担いたい」と嬉しいことを言ってくれている子が既にいるので、期待している。



中桐 悟氏

三児の父。既存の学童野球チームの運営体制に疑問を感じ、2021 年 4 月にゼロからクラブを立ち上げた。クラブは練馬区、板橋区を拠点に、連盟非所属の独立チームとして活動。「保護者の業務負担一切なし」「罵声や高圧的な指導を完全禁止」「勝利至上主義の否定」など 9 つの約束を掲げ、野球を通じた子どもの成長を目指す。自身の野球経験は乏しいため必要なリソースを各分野から集めてチームをコーディネートしている。BFJ 公認野球指導者<U-12,U-15>資格保有、会社員。

第

4

回

「子どもを成長させる大人」五つの条件

講師: 島沢 優子氏

(ジャーナリスト)

2024 年 5 月 21 日(火) 19:00~20:30 開催

主な講義内容

子どもを成長させる大人になるために

1. 「自分の成育歴を整理する」ことが重要

子どもを成長させる大人になるために、指導者も保護者もまずは自分の成育歴を整理してほしい。どのように育てられたかということは、その人の子育てや指導に大きな影響を及ぼす。

事前質問の中に「過保護や暴言等が目立つ保護者に対して、指導者や周囲の保護者ができる工夫はあるか」という問いがあった。皆さんには、暴言が目立つ人、過保護になっている人の背景に注目してほしい。指導者がその保護者を頭ごなしに否定してしまうと、そこには対立の構図しか生まれない。できれば「僕もそういう時期があったよ」「私もそうだったよ」という共感から始めて、「あなたはなぜそういう振る舞いをしてしまうのか」ということを傾聴してほしい。

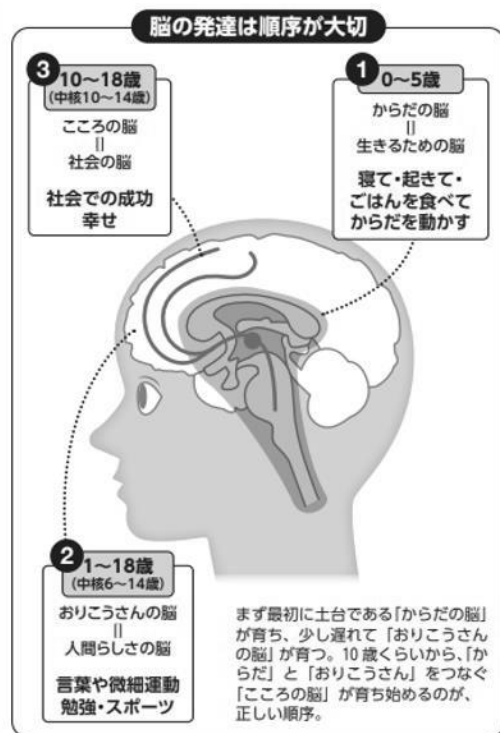
2. 「子育ての軸」「育成の軸」をつくる

次に「家族やチームをどのように育てたいか」「自分たちはどのように運営していくか」を考える。その際に「子育ての軸」「育成の軸」を作ることが重要で、譲れないものを決めたらぶれない強さを持つ。

本日は最低限の軸として3点を紹介したい。

1 つめは早寝早起きである。成田奈緒子氏は、

「からだの脳(生きるための脳)」「おりこうさんの脳(人間らしさの脳)」「こころの脳(社会の脳)」を順に育てることが重要と説く。からだの脳を作るのに不可欠なのが「早寝早起き朝ご飯」である。からだの脳を作っていないうちに無理にスポーツをさせると、最終的にこころの脳が育つ思春期にアンバランスな状態になってしまう。



図表 1-3 脳の発達は順序が大切

出典『高学歴親という病』p.117

(成田奈緒子著／講談社+α新書)

2 つめは心理的安全である。私たちの脳には、意欲をコントロールする「線條体」がある。子どもの線條体は、リラックスしている時、尊ばれている時、安心していられる時に活発に動き、反対に大人からけなされた時、否定された時、嫌なことを言われた時、理不尽なことをされた時には動かなくなる。

3 つめは主体性である。サッカー指導者の池上正氏が中学生を指導していた時のエピソードがある。大差で負けていた試合中に、選手の父親が後ろで金網をぐらぐらと揺らしながら「池上さん、負けているのですよ。ちゃんと言ってくださいよ」と叫んだ。池上氏はその父親に「甘やかしているわけではないですよ。私はもしかしたら日本一厳しいコーチかもしれないですよ」と言った。なぜ厳しいかという、子どもたちが今、どのような状況になっているのか自分たちで気づく必要があるからである。池上氏の指導は、子どもたちが自分で気づき判断することを追求している。

3. 「怒らないスキル」を方法論ではなく原論で

子どもの能力を解放するには、子どもが自分で判断できる環境が必要であり、そのためには子どもたちに任せなければならない。勝つために大人が命令していると、状態が悪い時には子どもたちが集中していないように見え、結局は根性論で怒ってしまう。その結果、子どもたちは自分で判断ができなくなる。

スポーツの指導者の中では「自分で考えさせる」ことがトレンドになっていて、コーチたちは怒りながらも一方では「考えろ」と言ってしまう、矛盾している。「怒ることは子どもの成長を妨げる」という原論を理解すると、大人は怒る以外の方法を探すようになる。指導スタイルを変えて成功体験を積み重ねると、怒る必要がなくな

る。教育や子育ては単純ではなく、怒るか褒めるかという二者択一ではない点にぜひ気づいてほしい。

4. 何かを決めるときこそ「放牧」せよ

たとえばサッカーのセレクションなど、何かを決める時に大人たちがいかに子どもたちに任せられるかが大事である。私はどのセミナーでも、「子どもが何かを決めるときこそ『放牧』しましょう」と話している。放牧とは、もちろん一緒に考えたり聞かれたことに意見を言ったりはするが、世話を焼かないで、子どもたちに決めさせることである。

この時、特に保護者はダブルバインド(=「二重拘束」、2 つの違う価値観を持つこと)の状態が起きやすい。普段は「楽しんだらいいよ」と言う一方で、進学や何かを決める際には急に「勝て」「頑張れ」と言い出すダブルバインドになると、子どもは最も混乱する。

5. 空は果てしない「問うスキル」は方法論ではなく哲学

日本サッカー界に多大なる貢献をしたイビチャ・オシム氏は、指導の中で「俺はこう思うけど、おまえはどう思う？」と選手にいつも問いかけていた。「空は果てしないぞ。おまえはもっと上に行けるはずだよ。上に行くにはどうしたらいいのか？」という言葉もある¹⁾。

オシム氏はそのように問いかけながら、わざとチームにカオスをつくり出し、選手が自分たちで切り替え、考えてコントロールするようにしていた。これは私が先ほどお話しした主体性がないとできないことである。

今は暴言やハラスメント、体罰などに対しては明確に NG が出されるものの、保護者や指導者の望ましい姿やスタイルが提示されてい

ない。保護者であれば家庭で、指導者であればクラブで、教員であれば学校で、スタイルを変えることをぜひ考えてもらいたい。伸ばす大人の行動は、「問いかける」「傾聴する」「楽しませる」「考えさせる」「余裕を持たせる」と「自ら学ぶ」という、5つの他動詞と1つの自動詞がポイントになる。

1) オシム氏の具体的なエピソードについては以下を参照。

島沢優子,2023,『オシムの遺産―彼らに授けたもうひとつの言葉』竹書房。

参考文献

成田奈緒子,2023,『高学歴親という病』講談社 + α 新書。

質疑応答

※質問と合わせて具体的なエピソードをいただいたケースもありますが、一部を編集して掲載します。

Q 子どもが小学生の頃から野球を続けて、高校には野球推薦で入学した。ところが「今まで親の圧に逆らえずに頑張ってきた。本当は高校では別のスポーツがしたかった」と急に言い出した。実は今、学校にも部活にも行けていない。親の私たちは圧をかけたつもりはないが、子どもに対する態度に反省の毎日である。子どもがスランプに陥っている時、特に環境の変化等で急に糸が切れたように変わってしまった時に、親はどうあるべきか。

A 「圧をかけたつもりはないが、態度に反省の毎日」がダブルバインドであり、子どもは混乱する。まずは子どもに「ごめんね、自分たちは

そんなつもりじゃなかったけれども、『野球頑張れ』と言い過ぎちゃったよ」と謝った上で、「相談に乗るから、これからどうするかということについて聞いてきて。その時までにはゆっくり休めばいいよ」と言ってあげてほしい。

子どもが「行けない、もう駄目だ」と言えたことは、子どもが弱みを見せられる親であれたということで、そこは親御さんたちも自分を褒めてほしい。謝ったあとは、「任せたよ、どうするかは一緒に考えよう」というスタンスで「放牧」していく。

もしあまりにも心が壊れているようなら、医療機関に行かなければならない。不安になっている子どもは昼夜逆転していることもあるので、その場合はまず生活リズムを整える。そのような対応を、保護者もいろいろ学んでほしい。

Q サッカーの指導者として、全員に出場の機会を作り、みんなでサッカーをすることを大切にしている。しかし、一部の選手と保護者には「勝つために交代しないほうがいい」「あなたには勝つ気がない」と言われる。粘り強く対話を重ね、理解を求めているが、ときどき自分よがりになっていないか不安になる。どのように合意形成を取っていけばよいか。

A 指導者が1人で戦うのは大変である。これはクラブの問題であり、まず「このクラブでは子どもをこのように成長させます」という哲学や文化を作る必要がある。「自分よがりになっていないか」に対しては、私は「いえ、そうではない。これでいいですよ」と言いたい。日本サッカー協会(JFA)も「補欠ゼロ」を提唱しているので²⁾、「JFAはこう言っていますよ、育成はこういうふうにやりますよ」と知らせて、クラブで合意形成ができればよいと思う。

保護者に対しては上から物を言わないこと

が大切だ。「一緒に子どもを育てるために、自分たちができることを共に学びましょう」と話して、さまざまな情報を取り入れてぜひ一緒に考えてほしい。

2) JFA グラスルーツ推進・賛同パートナー制度のテーマのひとつに「みんな Play！ 補欠ゼロ」があり、ウェブサイトでは賛同パートナーに認定された具体的なチームの事例が紹介されている。

https://www.jfa.jp/grass_roots/partner/play/



Q 大学生がスポーツをささえられたらよいと考えるが、責任の問題や、指導力不足の問題をどう考えたらよいのか。

A 指導にあたり「教えなければいけない」「習わせないといけない」と思わなくてよい。「子どもたちが自分でやってみる」「子どもたちと一緒に遊ぶ」というように、少し違う捉え方をしてほしい。中学生ぐらいになると YouTube やアプリなど、選手が自分を高められる道具がたくさんある。ぜひ自分で考えてできる子どもにしてほしい。その前にまずは大学生自身が自分を省みて、自分はどのように育ったのか、主体的に動いているか。そうではなかったら、そうならないためにどうするかを考えていけばよいと思う。

島沢 優子 氏

筑波大学4年時に全日本大学女子バスケットボール選手権優勝。卒業後、英国留学等を経て日刊スポーツ新聞社東京本社勤務。1998年フリーに。主にスポーツや教育関係をフィールドに執筆。『AERA』で「ブラック部活」というワードを最初に社会に届けた。著書に『スポーツ毒親 暴力・性虐待になぜわが子を差し出すのか』(文藝春秋)、『部活があぶない』(講談社現代新書)など多数。編著に『スポーツの世界から暴力をなくす30の方法』(合同出版)など。2020年より日本バスケットボール協会インテグリティ委員。2021年より沖縄県部活動改革委員。

2. クラブチーム取材

本章では、「浜松アークスピリッツ」「北摂ベースボールアカデミー」「浜北太陽野球スポーツ少年団」という3つの野球チームの取材内容と、第3回セミナー講師の中桐氏が立ち上げた「ジュニア・エンジョイ・ベースボール・コミュニティ」(JEB)運営メンバーによる座談会の様子をまとめている。すべての対象が野球関係者となった背景には、保護者の負担という観点で、野球がほかの競技に比べて課題が顕在化しやすい特性があるといえる。一般的に保護者、特に母親の間では「野球を習わせるのは大変」という認識が強いが、データ上でもその実態が確認できる。以下では、2021年度に実施した「小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究」から、野球を習っている子どもの母親がどのように活動をささえているのかを示すデータを紹介する。なお、データはすべて第3回セミナーでコーディネーターが使用した資料から転載している。

ここでは有効回答2,400名のうち、「野球」「サッカー」「水泳」「バレエ・ダンス」「バスケットボール」「テニス」「武道」「体操教室・体育教室」の8種目を実施している948名を分析対象とした。回答者の子どもが習っている競技種目は多岐にわたるが、ケース数の多い上記8種目に絞っている。なお、複数の種目を行っている場合には、保護者がより関わっている1種目を選択してもらった。また、ここでの「武道」には空手、相撲、少林寺拳法、合気道などが含まれるが、剣道と柔道は別項目として扱っているため含まれていない。各種目の詳細なデータは割愛し、野球を中心に考察を行った。

図表2-1では、家庭内やチーム内でのサポートについて、母親が「よくする」と回答した割合を種目別に算出している。8種目の数値を高い順に左から並べ、野球が該当するセルは太字とハイライトで強調している。野球は19項目中14項目で、8種目のうち最高値を示し、多くの母親が家庭やチーム内で子どもたちをささえるために高頻度で関わっていることがわかる。

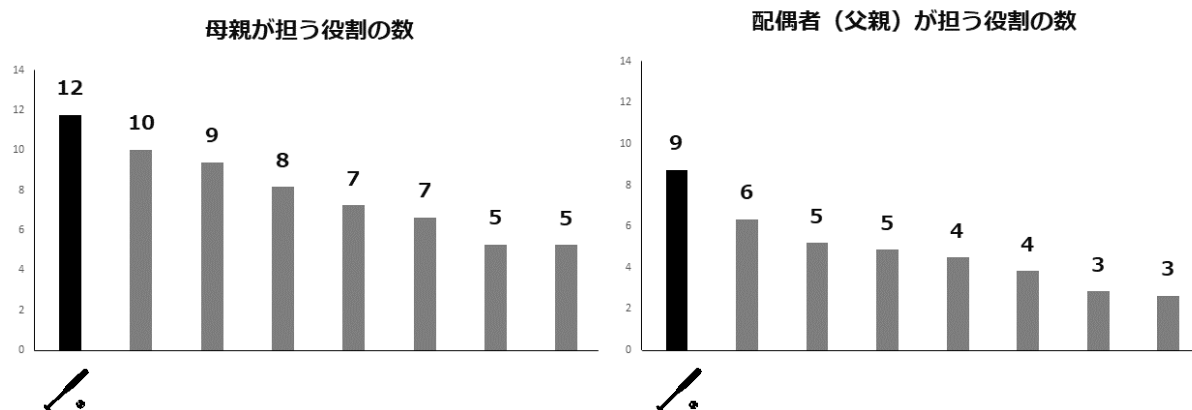
図表2-1 母親の関与(種目別)

		最も高い種目						最も低い種目	
【家庭内】	弁当づくり	33.3	12.2	11.3	5.1	4.7	4.3	2.4	1.1
	ユニフォーム等の洗濯	90.2	84.3	78.2	77.7	69.4	62.5	58.5	56.4
	お子様の送迎	83.0	80.0	77.3	76.9	72.2	70.6	70.4	69.4
	練習の付き添い・見学	43.1	38.3	36.7	29.4	28.2	26.4	24.3	21.6
	自主練習	21.7	16.3	13.7	11.4	7.7	6.8	5.7	2.2
	大会や試合の付き添い・見学	54.9	47.2	42.1	37.1	32.7	5.7	5.1	4.1
	スポーツ用具の購入	48.6	45.9	45.3	45.1	44.9	30.8	27.4	17.0
	ルールの勉強	29.4	18.9	16.3	12.9	10.5	7.7	4.4	2.3
【チーム内】	お子様以外の子どもの送迎	17.6	16.0	15.8	12.2	11.4	10.0	7.7	6.8
	お子様以外の子どもの飲食の手配	15.7	12.2	11.3	9.8	7.7	5.7	3.4	2.9
	クラブの練習の補助	8.5	7.8	7.1	6.1	4.5	2.6	2.3	1.5
	クラブの練習の指導	7.8	6.6	6.1	3.4	2.6	1.5	1.5	1.4
	活動場所の手配や予約	5.9	4.7	3.0	2.6	2.3	2.0	1.4	1.2
	指導者や保護者の送迎	5.9	3.8	2.3	2.0	1.4	1.0	0.0	0.0
	指導者・保護者の飲食手配	5.3	3.9	2.9	2.8	2.0	0.2	0.0	0.0
	大会等の観戦場所の確保	7.8	3.8	2.3	2.0	1.4	1.1	1.0	0.0
	指導者・保護者間の連絡や情報共有	15.7	13.5	12.3	7.1	6.1	4.5	2.6	1.5
	メーリスやSNS・ホームページの管理	5.9	4.7	2.9	2.3	2.0	1.0	0.8	0.0
	会費の集金や管理	5.9	4.7	4.1	3.0	2.7	2.3	0.0	0.0

注)「よくする」の%。

図表 2-2 では、図表 2-1 の各項目で「まったくしない」以外の回答をした項目数の平均値を示している。「よくする」割合だけでなく、頻度は低くても何らかの関与をしている母親・父親の割合を表しているといえる。これをみると、母親・父親ともに野球が最多であり、野球の特徴として、母親だけでなく父親もさまざまな関与をしている様子が浮かび上がる。

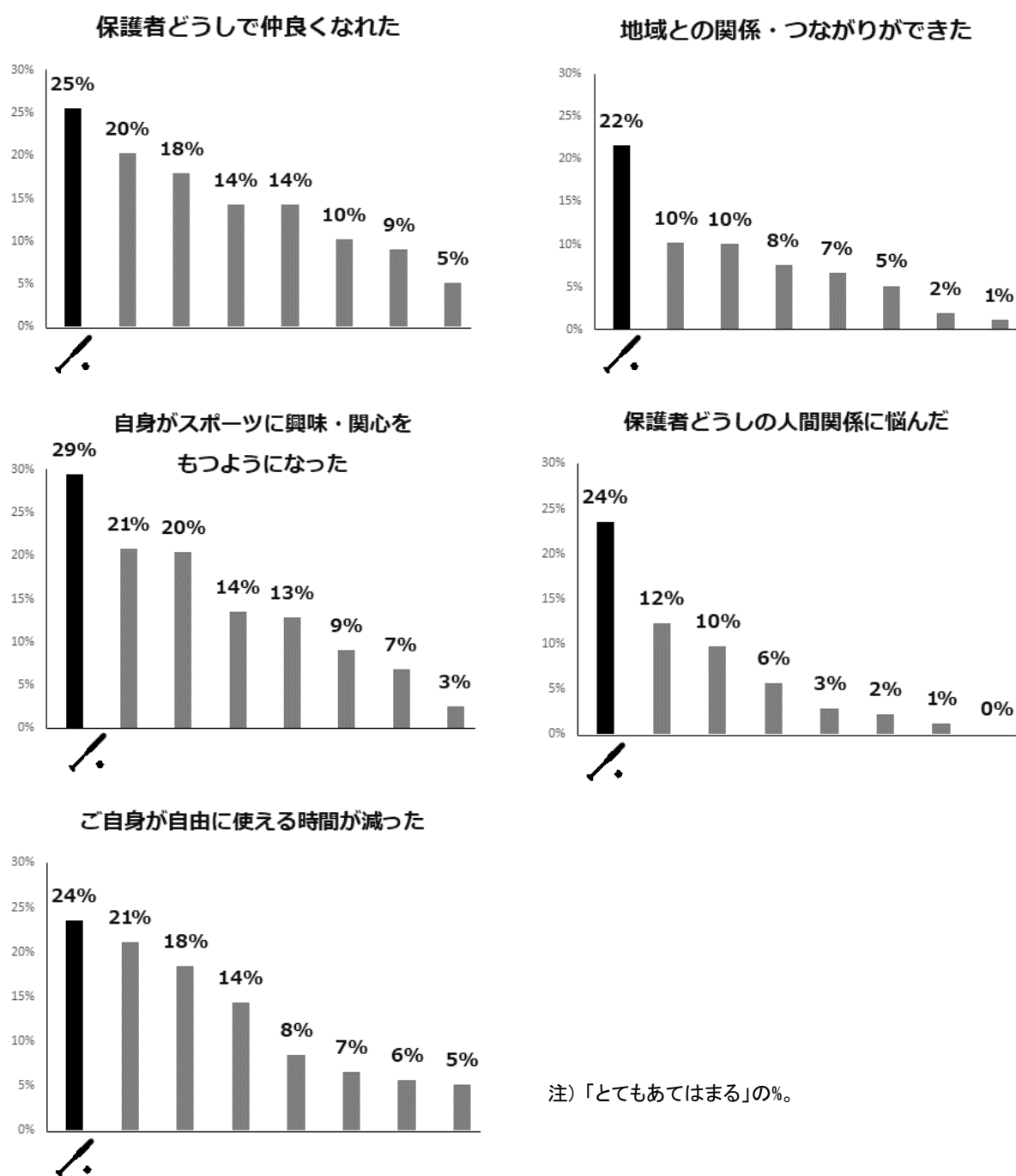
図表 2-2 母親の関与・父親の関与(種目別)



注) 図表 2-1 に示した各項目で「まったくしない」以外の回答をした項目数の平均値を表す。

子どものスポーツをささえる中で、保護者自身も変化を感じることもある。図表 2-3 では、子どものスポーツ活動を通じた母親自身の変化をたずねた項目に関して、「とてもあてはまる」の割合を種目別に示している。ポジティブな変化をみると、「保護者どうしで仲良くなれた」「地域との関係・つながりができた」「自身がスポーツに興味・関心をもつようになった」は、いずれも野球の母親が最も高い。特に「地域との関係・つながりができた」は、ほかの種目に比べて 2 倍以上の割合である。一方で「保護者どうしの人間関係に悩んだ」「ご自身が自由に使える時間が減った」という悩みについても、野球の割合が最も高い結果が示されている。

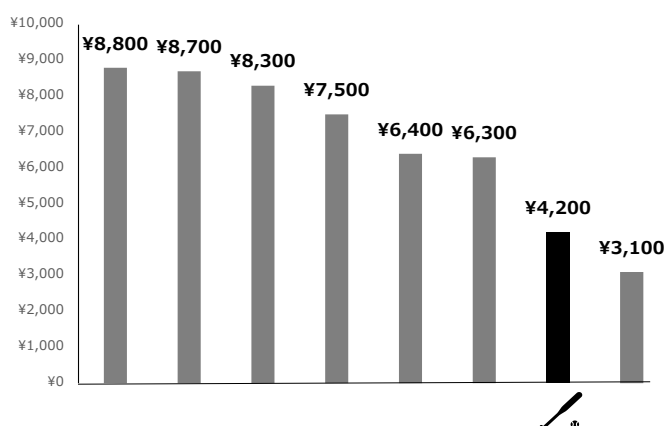
図表 2-3 母親自身の変化(種目別)



注) 「とてもあてはまる」の%。

このような結果の背景には、野球は民間企業が運営する教室やクラブよりも、地域のクラブチームで活動するケースが多い点あげられる。本調査で所属するクラブの種類をたずねたところ、取り上げた 8 種目のうち水泳、バレエ・ダンス、テニス、武道、体操教室・体育教室の 5 つは民間の教室やクラブが大半を占め、サッカーでは民間と地域のクラブがほぼ半々、野球とバスケットボールは地域クラブが主となる傾向がみられた(図表割愛)。一般的に地域のクラブは会費が安価に抑えられ、図表 2-4 で月額平均支出を確認すると、野球は 4,200 円と 8 種目の中で 2 番目に安く、高額な種目の半分程度である。その代わりに指導者やスタッフがボランティアで指導・運営をしているケースも多く、保護者の当番制も広く取り入れられ、負担感の高さにつながると推察される。

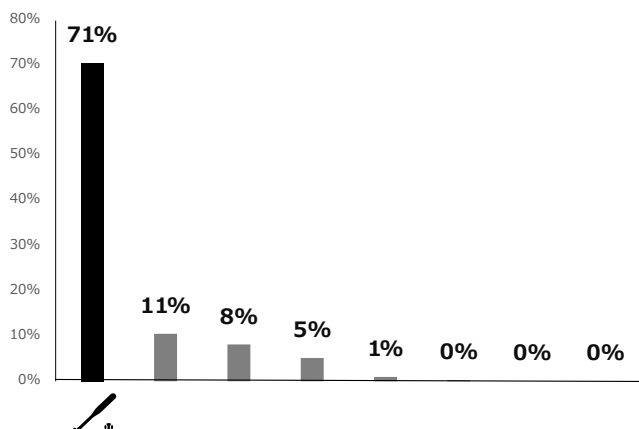
図表 2-4 活動にかかる 1 ヶ月あたりの平均支出(種目別)



もうひとつの背景として、野球の活動時間の長さがあげられる。図表 2-5 では 1 回あたりの活動時間が 3 時間以上の割合を示しているが、野球は 71%でほかの種目よりも圧倒的に高い。活動時間が長い分、飲食の準備やけがの手当て、送迎の負担も増え、全体を管理する役員の仕事も必要となる。

このように、地域クラブの運営形態と野球の活動特性が相まって、保護者の負担が増加しやすいと考えられる。近年、野球の指導現場では保護者の負担軽減が課題として意識されるようになり、その解決に向けた取り組みも進められている。取材したチームでは、保護者の負担軽減だけでなく、活動時間や指導方針の見直し、怒声・罵声の禁止など、幅広い改革が行われ、子どもも保護者も楽しめるスポーツ環境の実現に向けた具体的な示唆に富んでいる。

図表 2-5 1 回あたりの活動が 3 時間以上の割合(種目別)





「めっちゃ楽しい!!」野球教室

20代監督、新天地で挑む指導への思い

浜松アークスピリッツ（静岡県浜松市）

監督 石井 悠喜 氏

2023 年 8 月 20 日(日) 2024 年 7 月 13 日(土) 訪問

2024 年 4 月、静岡県浜松市に練馬アークスジュニア初の姉妹チームである浜松アークスピリッツ(以下、浜松 AS)が発足した。監督は練馬アークスジュニアのコーチも務める石井悠喜氏で、浜松市内の複数の野球場を利用して活動している。指導理念には、練馬アークスジュニアと同様に「保護者の業務負担ゼロ」を掲げ、大会での結果を目的とせず、軟式野球連盟には加盟せずに活動している。

1. チーム発足の経緯

石井氏は横浜市出身で、大学時代から練馬アークスジュニアでコーチを務めている。大学では教職課程を履修し、最後まで教員になるか悩んだものの、サッカーチームでのインターンや練馬アークスジュニアでの指導経験を通して、学童野球チームを自ら設立する決断をした。就職を機に浜松市に引っ越し、慣れない土地でありながらも 20 代の若さで新たなチームの創設に至っている。



監督の石井悠喜氏

最初に Web サイトや SNS を開設し、2023 年 8 月に第 1 回体験会を開催した。当日は年長から小学 4 年生までの子ども 14 名が参加し、大半が野球初心者であった。11 月には第 2 回体験会を実施し、その後入会受付を開始する。2024 年 1 月の初回練習時には既に定員に達し、4 月に正式なチームとして発足した。7 月の取材時点では、メンバーは 3・4 年生を主体とする 15 名、定員が空くのを待つ「キャンセル待ち」の子どもも約 15 名であったが、その後も希望者が相次ぎ、11 月時点では「キャンセル待ち」が約 25 名に増えている。

指導スタッフは石井氏を含めて 7 名が在籍している。横浜や浜松で知り合ったスタッフ、提携チームであるビクトレ豊橋から来るスタッフ、静岡県野球連盟に所属するアスレティックトレーナー(AT)も含まれる。AT は浜松 AS が連盟非加盟であることを理解した上で連絡を寄せ、スタッフとして協力している。日曜のみ来られるスタッフや、2 ヶ月に 1 回程度参加するスタッフ



第 1 回体験会

もいて、基本的には石井氏が指導を行っている。

ユニフォームとキャップは青を基調としたデザインが採用され、用具は基本的に各自が持参している。会費は月 7,300 円で、練馬アークスジュニアと同様に野球チームとしては割高ではあると認識するが、指導者には謝金を支払っている。現在は対外試合を行っていないものの、2025 年春ごろには市内のチームと試合ができるよう検討している。また、石井氏は現在も度々上京して練馬アークスジュニアで指導しており、両チームによる合宿も実施している。ゆくゆくは、試合の実現も期待されている。

チームの運営方針は基本的に練馬アークスジュニアの指針を受け継いでいるが、石井氏は教員志望だったこともあり、教育的な視点を大切にして、夏休みの勉強会や練習前の宿題の時間を設けることもある。子どもたちへの声掛けにおいても、「楽しくやるためにはどういうことが必要だろう」「やるべきことをやらないで、やりたいことだけやるのは違う」というスタンスを大事にしている。

また、日ごろの練習では iPad や野球ノートを活用している。子どもたちは手慣れた様子でお互いのプレーを iPad で撮影し、動きの確認を行っている。野球ノートは目標や練習の振り返りを記入するものであり、浜松 AS では約 9 割が提出している。石井氏は「書きたいと思わせるような声かけや仕組み作り」を意識し、月末にはノートを回収して一人ひとりに丁寧なコメントを書き、シールがたまったら野球グッズと引き換える仕掛けを取り入れている。ノートを確認することで、自身では分からなかった子どもの気づきや考え方を把握し、日々の指導に還元している。石井氏は「大人は教えすぎてしまう。野球ノートを見ると、子どもたちは学んだ

ことをひとつしか書かない。だから、教える時には難しく言いすぎず、伝える点はひとつに絞るよう意識している」と指導方針を明かす。

2. 活動中のチームや保護者の様子

2023 年 8 月に開催された第 1 回体験会では、初心者の子どもも対応できるよう基本的な動作の確認から始め、ゲーム形式の練習までが行われた。慣れない環境に緊張した様子の子どももいたものの、多くの保護者が見学に訪れ、あたたかい雰囲気の中で進行した。

複数の保護者に話をうかがったところ、保護者同士が知り合いのケースはほとんどなく、ネットや SNS で浜松 AS を知って参加したという。浜松市内のみならず、隣接する湖西市や磐田市などからの参加者もみられた。母親の一人によれば、浜松市内には同様に短時間練習・連盟非加盟・保護者当番なしを掲げるチームがあるものの、いずれも希望者が多く、小学 1 年生でも既に定員に達しているという。見学者は皆、東京から来たコーチによる新チームに大きな期待を寄せていた。

保護者が特に評価していたのが、「週末 1/4 ルール」(週末の土日を午前午後 4 分割し、そのうちひとつの時間帯を野球に使うという考え方)で、「地元のチームでは土日がすべてつぶれてしまうので参加できない」という声が多く聞かれた。また、保護者は異口同音に「地元の野球やサッカーのチームは本当に勝ちたい子しか入れない」と語っていた。さらに、母親からは「共働きのため土日の当番ができない」、父親からは「野球経験がないので審判は難しい」という意見も多かった。このような話は練馬アークスジュニアの保護者からも聞かれており、同じような意識の家庭が集まっていることがわかる。

石井氏は初期の段階では活動場所の確保に苦勞しており、この時の会場も市内北部のややアクセスが悪い場所であった。終了後には、保護者が石井氏に別の会場を紹介する場面もみられた。

チーム設立後の7月13日に訪問した際には、浜松市の中心部に近い和地山グラウンドで活動していた。野球場は4面あり、浜松ASを含め3チームが同時時間帯に活動していた。時折雨が強まるあいにくの天候で、この日の子どもの参加者は普段より少ない10名であった。最初は父親6名と母親1名がいて、数組の親子がキャッチボールをしていたが、活動が始まるとほとんどの保護者はその場を離れ、残った保護者はベンチや持参した椅子に座って見学していた。練習はかけっこやラグビーボールなどの大きなボールを使った運動から始まり、キャッチボールへと進んでいく。

保護者はしばらくの間、ゆったりと見学を続けていた。投球練習が始まると、子どもたちは投げるのに夢中で集球ネットにたまったボールの回収を忘れていた。その様子に気づいた父親2名が、自主的にボールを回収し始め、その後もボール拾いや用具の運搬などに協力していた。



投球練習の様子

試合形式の練習では、各チームで子どもた

ちが打順を決めていた。ピッチャーを務める石井氏に対して子どもが「ナイスピッチング！」と声をかけ、石井氏が「ありがとう！」と応じる場面もあった。第1回体験会では初心者ゆえのぎこちなさがみられたが、この頃にはゲーム形式の練習が十分に成立し、「めっちゃ楽しい!!」をテーマに掲げるチームらしく、笑い声や前向きな発言が絶えない明るい雰囲気広がっていた。頻繁に見学に来れる父親も「この数ヶ月ですごくうまくなった」と感心する。終盤には迎えに来る保護者も増えてきたが、怒声や罵声はまったく聞かれなかった。



打順を話し合う子どもたち

活動の最後に石井氏が子どもたちに話をしていると、数名の父親がグラウンドの整備を始めた。当番制はないため、手伝いをせずに見学している親のほうが多い。母親同士の会話が弾む様子もみられ、体験会の時にはなかった保護者間のゆるやかなつながりが感じられた。

活動中に数名の保護者に話をうかがったところ、「土日がすべてつぶれない」「勝利至上主義の否定」「保護者の当番なし」の3点が野球に参加するハードルを下げている、「できるかわからないけれど野球をやりたい」という子どもの希望にこたえやすいとのことであった。

保護者との関わりについて、チームを設立したばかりの頃には、活動内容や石井氏の声掛けに対して疑問や異論を持つ保護者もいたという。そのような保護者に対しても、石井氏はチームの方針や監督としての考えを丁寧に伝え、信頼関係を築きながら進めてきた。

また、20代でチームを立ち上げた石井氏は、監督としては周囲の指導者に比べて格段に若い。「僕も子どもを育てた経験がないので、保護者の方たちは先輩。それが良さでもあり、難しいところでもある」と述べている。一方で、ある父親は『指導者が足りないが、自分たちの方針に合う方をみつけないと』と監督がおっしゃったのがすごく理解できる。親としても中途半端な手伝いはどうなのかと迷うけれど、言ってくればやれることはやってあげたい」と監督の姿勢に理解を示し、協力的であった。石井氏も『来てくれてありがたい』と思ってくださる保護者、『応援したくなる』『助けたくなる』という思いの保護者がほとんど」と語る。

3. 課題と展望

浜松 AS にとって、唯一の課題は指導者不足であった。SNS でも頻繁に募集をかけてきたものの、応募はなかなか増えず、「そもそも絶対数として足りず、たとえ来ていただけてもチーム方針とミスマッチだと難しいので、二段階で困っている」と率直に語っていた。また、都心部でアクセスのよい練馬との地域性の違いや、「浜松に来て1年しか経っていないために

つながりが希薄な点」も背景にあると考えていた。

しかし、取材後の2024年11月、練馬アークスの中桐氏からの紹介をきっかけに、社会人野球部の選手経験があるコーチが参画することとなった。その結果、「キャンセル待ち」の子どもたちにも徐々に入会案内ができるようになったという。さらに、もう一人の社会人コーチや、学生コーチが加わる可能性もある。学生コーチの採用について、石井氏は「今までは積極的に考えられなかったが、自分も子どもたちとの関係性ができて余裕が出てきた」と心境の変化を語る。また、保護者にアンケートを実施し、保護者コーチの導入について意見を求めたところ、「今の体制がよい」という声が多かった。この結果を受けて、石井氏としても保護者コーチは設けず、現在の関係性を継続したいと考えている。

浜松 AS は静岡県内の複数のチームとも関係を築いている。当初は「チーム同士のすみ分け」を意識して、あえて浜松市内のチームとはコンタクトをとらないようにしていたが、LINEでほかのチームから連絡をもらい、交流が始まっている。こうしてつながりができたチームのひとつが3節で紹介する浜北太陽野球スポーツ少年団で、特に活動場所の確保に苦労していた時期には、監督の竹内氏から多大な協力を得た。石井氏も掛川市や静岡市のチームに自らコンタクトをとり、将来的には静岡県全体でのリーグ構想も視野に入れている。



子どもも大人も野球をあきらめない
主夫目線が叶えた地域のつながり
NPO 法人 北摂ベースボールアカデミー
(大阪府豊中市・箕面市)

理事長 植松 剛史 氏

2024 年 9 月 18 日(水)・19 日(木)、10 月 20 日(日) 訪問

北摂ベースボールアカデミー(以下、北摂 BA)は大阪北部の北摂エリア(豊中市・箕面市)を拠点に活動する NPO 法人である。子ども向けの野球教室に加えて、成人向けのイベントや野球スクール、自治体や企業も巻き込んだ「豊中スポーツまつり」などの多岐にわたる事業を展開している。2022 年 3 月には、スポーツ庁による第回「Sport in Life アワード」の団体部門優秀賞を受賞し、スポーツ人口の拡大に資する優れた取り組みとして評価されている。

1. チーム設立の経緯

北摂 BA の理念の背景には、理事長を務める植松剛史氏の専業主夫としての経験がある。植松氏は小学校の教員を経て、2017 年から専業主夫として家事や育児に励んできた。その間に周囲の「ママ友」から、野球は保護者の負担が大きく、習いごととしてのハードルが高いという声を聞くようになった。植松氏は「子どもに

スポーツを習わせるのは、健康に成長させるためだけでなく、親が子どもから離れて自分の自由な時間を確保する目的もあると、主夫をして実感した」と語る。

そこで「親の時間を奪わないチームであれば、参加者が集まるのではないか」と考え、「入りやすくやめやすいチーム」「保護者の負担がないチーム」をコンセプトに、年長児から小学生を対象とした野球教室事業の立ち上げを決意した。学生時代に NPO に関わった経験をいかして NPO 法人北摂ベースボールアカデミーを設立し、2019 年に「初心者のための野球教室」(以下、「野球教室」)を豊中市で開始した。まずは子どもが野球を楽しめるか気軽に試してほしいという思いから、ユニフォームは用意せず活動時の服装は自由とし、用具もチームで貸し出すなど、初期費用の負担を抑える工夫をしている。2022 年には箕面市でも 2 か所の教室を開講し、現在は豊中市の千里北町教室と箕面市の萱野教室が定員に達し、特に土曜日の萱野教室は多くの「キャンセル待ち」を抱えている。

指導者は 10 数名いて、知人の紹介やネットでの応募が多く、他チームでの指導経験があるコーチや小学生を初めて指導するコーチなど、経歴は多様である。シフトは各自の都合に合わせて組んでいる。保護者の当番はなく、会計担当は植松氏の「ママ友」に依頼し、用具



理事長の植松剛史氏

の管理・運搬、ビブスの洗濯、広報や活動情報の整理は、基本的に植松氏が担当する。

毎回の活動の最後には紅白戦形式の試合を行うが、リーグ戦などの対外試合には参加していない。植松氏は「試合のためのチームを作らない」と意識し、遠征や対戦相手を探す手間を省き、保護者の負担軽減につなげている。

「野球教室」とは別に、2020 年に「野球場開放」事業も開始した。これは団体登録が必要な野球場の借り上げを北摂 BA が行い、子どもたちに開放する取り組みである。会場にはバットやグローブ、軟球、ウレタンボール、テニスボール・ラケットなどが十分に用意され、子どもたちは用具を持参せずに参加できる。1 時間ほど自由に遊んだ後、最後には紅白戦を行う。計 46 名が登録する人気の事業である。



貸出用具で遊ぶ子どもたち

これらの子どもの教室事業は黒字化しており、指導者やスタッフへの給与が支払われている。給与体系に関しては、最低時給からの昇給制度が明確に設けられている。指導者の中には、ボランティアではなく仕事を探す過程で北摂 BA をみつけたコーチもいて、「このチームでは有休があるのがポイント」と話す。植松氏は「今までのスポーツはボランティアでささえられてきた部分もあるが、その仕組みを少し変えたほうがいいかなという思いがあった。最低

限、生活ができる状態にしたい」との考えを示している。

また、子どもたちが状況に応じて「野球教室」と「野球場開放」、既存の他チームを柔軟に選べるよう配慮している。「野球教室」は初心者が試せる場の提供を目的とし、レベルの高い環境で続けたい子どもには既存のクラブチームの紹介を重視している。さらに、ほかの種目や活動に興味をもち、一時的に「野球教室」を離れた子どもが再び戻る可能性も考慮している。

「野球場開放」に関しても、既存のチームに合わず参加するようになった子どもや、他チームに移った後で平日の練習場所を求めて参加する子どもがいる。北摂 BA 内でも、千里北町教室が活動する木曜日は 6 時間授業を行う学校が多く、高学年の子どもが参加しづらいため、水曜日の「野球場開放」に移ることも認めている。植松氏は「入ったチームに合わなくても、野球の道が断たれることなく、ほかの選択肢がある状態を作りたかった」と語る。

加えて北摂 BA では、成人向けの事業も拡大している。2021 年には「女性のための野球スクール」と「大人の野球イベント」を開始した。前者は野球初心者の成人女性を対象とするスクールで、取材時点では 23 名が在籍していた。後者は「野球好きの大人」を対象とした個人参加型イベントで、キャッチボールやシートノックから始めて、後半には紅白戦を行う。メンバーが都合のよい時に気軽に参加できる点も好評である。「大人の野球イベント」の参加者が、子どもの教室事業や後述する「豊中スポーツまつり」のスタッフとして協力するなど、事業間の好循環もうまれている。なお、これらの活動内容はすべて、NPO 法人の事業報告書として公開されている。

2. 活動中のチームや保護者の様子

水曜日に訪問した「野球場開放」では、平日の放課後のため、子どもたちは開始時間前に一斉に集合するのではなく、三々五々に来場していた。スタッフは植松氏とコーチ 1 名の計 2 名である。

この日は子ども 26 名、保護者 3 名(母親 2 名、祖母 1 名)がグラウンドにいた。子どもたちは自然とグループに分かれ、テニスボールを使って試合形式のゲームをしたり、コーチとピッチング練習をしたりと、それぞれのレベルや関心に応じて楽しんでいる。参加して間もない子どもには、植松氏が適切に声をかけ、自然となじめるように工夫している。

グラウンドに来ていた母親のうち 1 名は今回がまだ 2 回目の参加であり、もう 1 名は子どもが年長児であるため付き添いをしている。二人とも豊中市には多くの野球チームがある中、ネットで情報を集め、北摂 BA をみつけたという。もう一人の祖母は、「元々は母親が北摂 BA をみつけ、送迎を頼まれたが、今は自分の運動を兼ねて毎回ここに来るのが楽しみ」と声を弾ませる。コーチの到着が遅れていることに気づき、集球ネットを慣れた様子で組み立てる姿もみられた。その後もフェンスを越えたボールを拾いながら歩くなど、スタッフのように心配りが行き届いていた。

続いて木曜日に訪問した「野球教室」(千里北町教室)には、約 30 名の子どもが参加していた。水曜と同様に、子どもたちは三々五々に集まってくる。野球用のシャツやユニフォームパンツを着用する子どももいれば、普段着のハーフパンツやデニムで参加する者も多い。「野球場開放」と同様にバットやグローブはチームから借りられるように用意されているが、自前の用具を持ち込む子どもが大半である。



「野球教室」の練習

和気藹々とした雰囲気の中、「野球教室」では遊びだけでなく専門的な指導にも注力し、植松氏が作成した指導案に基づいた活動が実施される。当日は 15 歳の高校生から 75 歳までの 7 名の指導者が参加し、練習中は植松氏が全体を指導し、ほかの 6 名が個々の子どもたちに声掛けや指導を行っていた。



指導スタッフ

活動の終盤には 10 人弱の保護者が子どもの迎えや見学に訪れていた。ベンチから楽しそうに撮影する保護者、グラウンドの片隅でうたた寝をする保護者、バットを持ち子どもに張り切ってアドバイスする保護者など、それぞれのスタンスで関わっていた。「野球教室」も保護者の多くは「ネットでみつけた」と述べ、「子どもが厳しいチームには入れなかった」「親のことも

考えてくれて入りやすい」「平日にたくさんの大人が子どもをみってくれるありがたさを感じる」など、チームの特徴を評価する声がよく聞かれた。

3. 課題と展望

北摂 BA の主な課題は、活動場所の確保である。新しい理念で団体を設立すると、さまざまな改革は進めやすい。しかし、既存の団体が多く場所を押さえており、学校開放も新規団体を受け付けていないケースがあるため、活動場所の確保が難しい状況にある。解決策として平日を活動日に設定したり、既存の団体と相談して活動場所を共用したりしている。また、「野球教室」のひとつである箕面市の石丸教室では、市内のサントリー箕面トレーニングセンターと交渉し、施設内の野球場を使用している。

植松氏は「野球教室」のみでは事業の収益としては十分でないと考え、将来的な展望としてプロ興行の立ち上げを視野に入れている。北摂エリアで町対抗のローカルなプロ野球を実施し、興行収入が上がれば野球の普及活動やコーチの給料、場所の確保などに充てる計画である。

その第一歩として、2023 年に地元の企業やスポーツチームを巻き込んだ「新千里野球まつり」を開催した。市内の町別対抗野球大会を核とした大がかりな地域イベントで、キッチンカーや子どものスポーツ体験コーナーを設け、「祭りがやっているからなんとなく来た人が、野球の試合も気軽に見て楽しめる」状態を目指し、約 800 人の集客につながった。

このイベントを発展させ、2024 年 10 月には「豊中スポーツまつり」を開催した。豊中市が主催するソフトボールの「第 57 回豊中市秋季市民大会」の決勝戦などをプログラムの一部に組み込み、会場周辺にベンチを設置し、実況も行っており、選手だけでなく観客も楽しめる大会を模索した。

植松氏は「地域の会社と地域の人たちをつなぐお祭りになるように」と考え、地元の企業やクラブチームと連携している。協賛は 7 社にのぼり、そのうちの 1 社である市内のパナソニックホームズ株式会社は、当日会場で PR ブースを出展した。子どもの体験コーナーには、北摂 BA に加えて地元の豊中ラグビースクール、箕面学園高校、忍者ナインもそれぞれラグビー体験や体力測定のブースを提供した。現在は豊中市の助成金を活用しているが、将来的には協賛金のみで実施できる体制を目標にし、その先に地域のプロ野球リーグを構想する。

植松氏は「教室事業を全国展開する方法もあるが、広げるよりローカルにエリアを限定して取り組むほうが、子どもの活動が女性や大人の取り組みにつながる相乗効果は高いと思う。野球教室だけで収益を求めると、家庭に多くの物を買ってもらい、お金も出してもらうことになり、結局『野球をするのにお金がかかる』という現状は変わらない」と語る。さまざまな形で企業と連携し、スポンサー料を得る一方で、保護者には地元のサービスを楽しみながら利用してもらえよう宣伝する。北摂エリアで継続的な関係を築きながら、子どものスポーツ環境が維持される仕組みを構築している。



できる人ができることを
監督と保護者がささえあう伝統チームの再出発
浜北太陽野球スポーツ少年団（静岡県浜松市）

監督 竹内 豊 氏

2024 年 7 月 13 日(土) 訪問

浜松アークスピリッツの石井氏から、同じ浜松市で活動する浜北太陽野球スポーツ少年団(以下、浜北太陽)を紹介していただいた。浜北太陽は、浜松市北部にある市立内野小学校を主な拠点とする少年野球チームである。練馬アークスジュニアや浜松アークスピリッツ、北摂ベースボールアカデミーが最初から現在の活動方針を掲げて新規チームを立ち上げたのに対して、浜北太陽は長い歴史のあるチームを改革した事例である。そのため、以下ではチーム改革の経緯を中心に紹介する。

1. チーム改革の経緯

浜北太陽は1982年創立、今年で43年目を迎える歴史あるスポーツ少年団である。2005年、現監督の竹内豊氏は、ご子息の入団と同時に保護者コーチに就任した。この時点でチームには20年以上の歴史がある。



監督の竹内豊氏

しかし前監督と保護者会の間でトラブルが

発生し、保護者が二度にわたり監督の辞任を要求する事態となる。その度に、保護者によって退団させられる団員も複数いたという。最終的には軟式野球連盟が仲介に入り、監督の辞任に至ったため、2010年には竹内氏が保護者監督に就任し、翌年のご子息の卒団後も外部監督としてチームに残った。

竹内氏は監督就任時に、保護者による「お茶当番」を廃止した。コーチ時代には、きょうだいの多い家庭の親が毎回のお茶当番を担当できず、それが原因で保護者同士のいさかきが生じ、子どもが退団を余儀なくされるケースがあったという。

ところが、影響力の強いごく一部の保護者が身勝手なふるまいを続けて竹内氏と対立し、状況は収束しなかった。連盟からも「監督が代わっても結局同じことが起きるのであれば、父母会に問題があるのでは」と懸念を示され、その後、チームは「父母会」の解散に至る。しかし騒動を経て6年生が一斉に退団し、さらに前監督時代の「風評被害」も続いて新規の団員は増えず、チームは一時期団員2名にまで減少した。このため、およそ7年間は公式戦への参加もままならない状況が続いた。

苦しい時期が続く中で、2019年に同じ浜松市内で活動する浜松タツツンズから練習試合の打診を受ける。浜松タツツンズは今年で創立14年目を迎える連盟非加盟の野球チームで

ある。しかし、連盟では規定に基づいた活動や大会の実施を原則とし、基本的には連盟に加盟するチーム同士での対戦が一般的である。そのため、当時連盟に加盟していた浜北太陽は、遠回しに注意を受けることとなった。そこで竹内氏は、「現在は公式戦ができる状況にない。この先も公式戦を目指すなら連盟に加盟したままのほうがよいが、目指さないのであれば、連盟を外れて自由に活動しようか」と保護者に提案し、話し合いを行う。結果、浜北太陽は連盟非加盟での活動を選択する。ただし、代替わりした後の保護者が再加盟を希望する場合に備え、竹内氏は連盟に話を通してある。

ここからチームにおける数々の改革が始まる。活動方針に「脱勝利至上主義」を掲げ、活動日時は土日いずれかの午前とした。試合はTカップ大会という自主大会を開催していたが、現在はオールジャパンベースボールリーグに参加している。同リーグは全国各地で軟式野球のリーグ戦を開催し、各チームが対戦相手や日程、球場や審判を調整する「自主対戦方式」を採用している。試合規定では、「小等部大会」には、「日本国内で活動する学童軟式野球チームであれば、どのチームでも」参加でき、「大会規約にのっとり、マナーを厳守したフェアプレーができること」を参加資格としている。

浜北太陽では、練習出席率が上位の子どもを優先して試合に出場させている。同率の場合のみ学年や入団順のアドバンテージがあるものの、低学年の児童でも練習への参加が多ければ試合に出場できる仕組みである。

また、公式戦出場に伴う遠征費などが不要になったため、会費は以前の月 3,000 円から月 2,000 円に減額された。竹内氏は、指導者が報酬を得るべきという価値観を十分に理解しながらも、自身はあくまでボランティアとして関

わり続けたいという思いから、報酬を受け取っていない。

保護者の関わり方も大きく見直された。廃止した保護者会に代わり、現在は 3 年生以上の各学年から保護者の代表 1 名を出してもらい、6 年「代表」、5 年「会計」、4 年「会計補佐」、3 年「監査」と監督の計 5 名で構成する「役員会」を組織している。役員会においては 5 名が同等の議決権をもち、基本的には話し合いを行い、決まらない場合には多数決を採用する。

当番制を設けていないため、普段は送迎のみを行う保護者も多い。一方で、約 40 名の団員に対して常駐する指導者は竹内氏と外部コーチ 1 名であり、年に 2 回行われる保護者会では「当番のシステムはなくすが、関わる大人が多いほうがよい活動はできる」と伝えている。こうした意図を保護者も理解し、自主的に参加して練習を補助する父親が一定数みられる。

また、会費 2,000 円のうち 500 円は「サポート会費」として管理され、活動をサポートする父親たちの忘年会費や、野球応援のガソリン代の補助などにあてられている。このようにして、参加する保護者と参加しない保護者の差を埋める工夫がなされている。

竹内氏は保護者会でトラブルが起きていた頃を、「指導者が少数で保護者が多数のため、議論の分が悪く、会長が勝手に『全体の意見』と言えば全体の意見ということになってしまう。正常な議論ができない」と振り返る。また、保護者の役割については「指導者や先生を子どもに向かせること」と述べる。父母会を解散し、子ども・指導者・保護者の理想的な関係性を明確にしたことが、現在のチームにおける保護者の関わり方を形づくったといえる。

このような改革の結果、近年は団員が急増し、ほかの少年団から「なぜそれほど集まるの

か」と聞かれるほどになっている。竹内氏や保護者は、そのきっかけを2018年9月から始めたFacebookと推察する。Facebookの「自己紹介」欄には、「お茶当番、父母会が無いチームです。親が忙しく、既存の野球チームに参加出来ない子供たち中心に親同士も和気あいあいと活動しています。」と書かれ、当番なしの方針が前面に打ち出されている。

現在、2年生以上は定員に達したため新規入団を断っている。活動方針に共感して選んだ家庭が多いため、団員は内野小学校区に限らずさまざまな学区から通っている。1学年7名を定員としているが、実際には9～10名、現在は総勢32名で活動している。

竹内氏は定員を超えても、ひとり親の家庭や発達障害児、きょうだいが障害児の子どもなどは例外的に受け入れている。そもそもの保護者も同じサポートができる前提には立っておらず、「できる時にできる人ができることを」「できない世帯を責めるのではなく、やってくれた世帯に感謝をする」という方針が掲げられ、保護者内にも浸透している。



竹内氏と子どもたち

2. 活動中のチームや保護者の様子

訪問した日は変わりやすい天気の中、8時半から12時まで活動が行われた。内野小学校のグラウンドは広く、別のサッカーチームと半面ずつに分けて使用している。朝の時点で子

ども30名弱と父親8名が集まっていた。必要な用具はグラウンドの倉庫にあり、子どもも父親も慣れた様子で取り出している。父親たちはバックネットなどの大きな備品を運んだり、サッカーチームとの境目にネットを張ったりと積極的に準備を進めている。子どもたちは背中に名前が入ったおそろいのユニフォームを着用し、刺繍入りのエナメルバッグを持参している。練習に参加していた父親によると、団員数が急増したため、背中の名前で誰かを判断しやすくなり、非常に役立っているという。

低学年を中心としたティーボールなどを行うグループと、高学年を中心に実戦練習ができるグループに分かれ、バッティングや守備練習、試合形式のプレーと続く。父親8名は、技術指導をする者、ボール拾いに協力する者、写真撮影や、参加率の高い団員への参加賞を準備する者など、それぞれが多様な立場で活動をささえている。低学年・高学年いずれのグループにもコーチに近い役割を担う者がいるため、父親だけでも多くの活動を円滑に進められる。父親たちは「来られる時に来ただけだから大変ではない」「来るのが好きで楽しい」とロケに語る。

チームに長く携わり保護者の中でも中心的な父親は、「普段練習に来ない親、来られない親にはなるべくやりやすい仕事をお願いしている」と語り、夫が海外在住で乳児育児中の母親は、「子どもの練習はお父さんたちがみてくれて、自分は自宅で簡単にできる作業を任されているので、助かっている」と感謝する。活動終了の時間が近づくと、迎えに来る保護者の数も増える。乳幼児連れの保護者も多く、子どもたちから目が離せない様子だが、可能な保護者は片付けに協力し、自然と「できる人ができることを」サポートする状況がうまれている。



試合形式の練習



片付けに協力する保護者

浜北太陽の入団申込書には「浜北太陽を選んだ決め手」という欄がある。具体的な記述をみせてもらおうと、「勝利至上主義ではないという点と保護者負担が少ないという点」「連盟に入っていない。家族の時間も考えてくれている。」「親の負担が少ないということも決め手ですが、何より楽しくのびのび野球ができる。だけど時間を守る、簡単に休まない、上手い下手だけでなく努力を認めてもらえる、という事を大切にしているところ」(いずれも誤字以外は原文通り)など、改革を進めたチームの特徴を保護者も理解し、選択した様子がうかがえた。

3. 課題と展望

浜北太陽はスポーツ少年団として活動しているため、本章で取り上げているほかのチームとは異なり、活動場所の確保に問題はない。

一方で指導者の確保は他事例と同様に課題といえる。この点について、竹内氏は「今に限ったことではない。これまでも潤沢に指導者がいた時期はない」と語る。

解決を目指し、2026 年度には浜松タツツズとの合併を予定している。一般的にチーム間の合併は、子どもの数が減少しやむを得ず行われる「消極的合併」が多く、調整が難航したり合併後に先細りしたりするケースが珍しくない。それに対して、竹内氏は今回の合併を「積極的合併」と位置づけている。両チームともに団員数に余裕がある中での決断であり、事故防止や子どもの安全確保を徹底しつつ、選手ファーストの理念で団員がよりよい環境で成長できるチーム、保護者が安心して子どもを入団させたいと思えるチームを目指している。

新チームではタツツズの現監督が「監督」に就任し、竹内氏は「ゼネラルマネージャー」として活動をささえる。練習にも参加し、ヘッドコーチの役割を担いながらも、主には対外調整や保護者対応を受け持ち、監督が子どもたちの指導に専念できる環境づくりを進める。

さらに試合の対戦相手を確保するため、浜松市および近隣市内における連盟非加盟のチーム同士の話し合いを進めている。浜松市を中心とする静岡県西部地域では、過去 2 年間で浜松アークスピリッツをはじめとした連盟非加盟のチームが 6 チーム新設されている。これらのチームとタツツズ、浜北太陽が連携し、竹内氏は中心的存在となっている。

将来的には、連盟加盟チームと非加盟チームが交流できるよう、連盟との交渉や新リーグの設立も視野に入れている。また、リーグ内で定員に達したチームがある場合には、希望者に別のチームを紹介するなど、各チームが適正な人数で活動できる環境も検討している。



学童野球に新たな選択肢を ジュニア・エンジョイ・ベースボール・コミュニティ (JEBC)

中桐 悟 氏 島本 隆史 氏 齊藤 宗章 氏

2024 年 12 月 10 日(火) 座談会開催

第3回のセミナーから約4ヵ月後の2024年4月1日、中桐氏は小中学生の野球チームが集う組織「ジュニア・エンジョイ・ベースボール・コミュニティ」(JEBC)を立ち上げた。JEBCには、北海道から沖縄までの30チーム(2025年1月時点)が参加し、「第二の選択肢」として、現在の社会環境やニーズに適応した先進的な野球の場を増やす取り組みを推進している。また、セミナーで紹介されたPCGリーグを引き継ぎ、「INTINITY BASEBALL LEAGUE U-12」(インフィニティ・ベースボールリーグ U-12)という新リーグを始動している。

今回は、中桐氏を含む実行委員メンバー3名に、JEBC結成の経緯や今後の展望に加え、学童野球の課題や保護者の理想的な関わり方について、幅広く語っていただいた。

1. 自己紹介・チーム紹介

中桐 練馬アークス Jr.ベースボールクラブ(以下、練馬アークス)の中桐です。私自身は野球経験がほとんどありませんが、「外部のリソースを活用し、保護者の負担を減らしながら、みんなに楽しく野球をしてもらおう」というコンセプトでチームを運営しています。

島本 練馬アークスは子どもたちが程よく熱量をもちつつ楽しんでいる、そのバランスが最高。

齊藤 クラス分けされて、トップクラスの子たちはより上を目指していますよね。練馬アークスの子はみんなうまいです。サードの子がバックハンドで捕ったり、走りながら片手で捕ってファーストに投げたりしていました。

中桐 正面に入れる打球は正面に入るように伝えていますが、バックハンドにトライしたことを否定はしません。みんな勝手にうまくなっています。



練馬アークス Jr.ベースボールクラブ代表
中桐 悟 氏

島本 さいたまインディペンデント(以下、インディペンデント)の島本です。私はずっとサッカーをしてきましたが、仕事で野球メディアに携わった縁で、子どもの野球に関わるようになりました。自分の子どもが小学生になり、野球をやらせたいと思って、2022年に「元気・感動・繋がり」をコンセプトにしたチームを立ち上げました。

齊藤 インディペンデントは野球だけでなく、

ラグビーやサッカーなどいろいろなスポーツをやっているのがすごい。野球でもコーチが下投げでボールを投げて、子どもたちが思い切り飛ばして、本当に楽しそうです。

島本 野球をやるハードルを低くしたいと強く思うので。小学生のうちは楽しくプレーし、中学生になっても「野球をやりたい」という気持ちを持ってもらえたらと思います。

中桐 あとは指導者の質がすごい。全国の学童チームと比べても比類ないレベルです。



さいたまインディペンデント代表
島本 隆史 氏

齊藤 ポジティブベースボールクラブ（以下、ポジティブ）の齊藤です。私は小学3年生から野球を続けてきました。2022年に今のチームを立ち上げ、今年で3年目です。「子どもたちと仲良く楽しく野球をする」というコンセプトで運営しています。

中桐 齊藤さんのチームは、とにかく雰囲気が良いですね。保護者も含めての、ファミリー感。あの一体感はどうやって醸成したのですか。

齊藤 うちは野球の練習だけでなく、都市対抗を観戦したり、遊園地やアスレチックに遊びに行ったりします。そういう時に保護者も来てくれるので、自然と仲良くなります。チームとしては送迎だけで十分なのですが、保護者も一緒に活動に参加してくれることが多いです。

島本 あのわちゃわちゃ感、好きですね。元気がない時がないです(笑)



ポジティブベースボールクラブ代表
齊藤 宗章 氏

2. JEBG の結成

中桐 野球をする子どもの減少に強い危機感を持っていて、このままでは野球界全体が縮小すると感じました。でも島本さん・齊藤さんをはじめ、私のチームと同じような考え方で運営をしている方が全国にいます。そこで「お互いを刺激し合い、高め合い、しっかりと発信もしていこう」というコンセプトで、コミュニティの立ち上げを考えました。

島本 立ち上げに際して、中桐さんが私たちに声をかけてくれました。私自身も野球メディアの仕事をしてきた中で、情報が共有されていないことで損をしているチームや人をたくさんみてきたので、横のつながりを作りたいと感じていました。

齊藤 私はPGCリーグでお二人と交流があり、話をもらいました。「何か後ろ盾がほしい」というのも、きっかけになった思いのひとつでしたよね。

中桐 国内の学童野球チームの多くはいわゆる「連盟」（全日本軟式野球連盟）かスポーツ少年団に属しています。どちらも歴史ある組織で素晴らしい面もたくさんあり、否定するつもりはありません。ただ、必ずしも今の社会の流れにフィットしていない部分もあります。

学童野球の大きな課題のひとつは、指導者の質の問題です。もちろんすべてのチームにあてはまるわけではないですが、まっとうな指導者から論理的に野球を教えてもらえない環境があるのが課題だと思います。練馬アークスではコーチには謝礼を払って教えてもらう体制をつくっています。

島本 練習時間の長さも課題だと思います。私自身も親なので、土日に子どもにスポーツをさせたいと思う一方で、家族の時間も優先したいというバランスの問題を感じています。

齊藤 うちも共働きだけど、やはり土日がすべて野球だと家族でどこにも行けないし。休みなしだね。練馬アークスの練習時間はどのくらいですか。

中桐 最長で4時間です。

島本 うちも3時間、長くて4時間ですね。

齊藤 うちも4時間です。あと、学童野球ではどうしてもトーナメント戦で勝つために、うまい子ばかりが試合に出る。その子が肘を壊すこともある。

中桐 少子化で1チームあたりの人数が減っているのです、余計にそういう問題がありますね。

島本 2～3年生が6年生の試合に出るとか、体力的にはきついですよ。子どもの環境は関わる大人が守っていかないといけないと思います。

中桐 同じような課題意識をもち、連盟に属せずに運営するチームは全国で増えています。そのような「新しい選択肢」を広げることで、学童野球の縮小を少しでも食い止めることができるのではないかと考えています。

島本 まさに「選択肢」のひとつです。旧来型のチームに入るのも良いですが、そのほかの受け皿が少ない現状を変えることが、子どもたちの将来につながると思います。

齊藤 野球は連盟やチームによって、ルールやボールが異なる。そうしたカテゴリーを超えたコミュニティがあればいいよね。

島本 特に少年野球は、つながっているようでつながっていない。国内のプロ野球が盛り上がっているのに、なぜ学童野球の組織はそれぞれが独立して連携していないのか疑問に感じています。

齊藤 学童野球は野球人口の入り口ですからね。選択肢を増やして、野球を始めやすい環境を作ってあげられたらいいですね。

中桐 これからチームを立ち上げる人や、野球を始める子どものハードルを低くしたいと思います。チームを立ち上げるのは大変なことだと思われていますが、ホームページとユニフォームを作ったら一丁上がり(笑)

齊藤 本当にそう。それで、JEBCに加入してもらいたい。

3. JEBC のこれまでの活動

中桐 2024年4月には、JEBCに所属するチームで集まって、野球教室を開催しました。

島本さんのご紹介で、社会人野球やプロ野球で実績のあるコーチに来ていただきました。初回は東京でやりましたが、今後は全国に広めていきたいです。

島本 8月には勉強会も開催しました。大手教育会社に勤務する東大野球部出身の方を呼んで、勉強の習慣づくりについて語ってもらいました。私たちはスポーツと勉強の両立も大事にしています。オンラインですが、熱心なチームからは4～5人の親御さんが参加してくれました。

齊藤 JEBCの全体ミーティングもオンラインでやりましたね。各地域やチームの課題を話してもらったり、ご質問をいただいたり。

中桐 地域によって違う悩みもあれば、同様の悩みもありました。共有して皆で解決策を語られて、すごく有意義だった。ほかには、チームの立ち上げ支援や既存チームの変革支援も行っています。支援したチームには、JEBCにご加入いただいています。

島本 最近では、これまでつながりのなかったチームからも連絡がありますね。少しずつ認知が広がってきたのかな。

中桐 全国に学童野球チームは1万以上あるといわれているので、まだまだです(笑)

「INFINITY BASEBALL LEAGUE U-12」についてですが、2020年に神奈川を起点に始まった学童野球の私設リーグ「PCG」(プレーヤーズ・センタード・ゲームズ)が前身です。このリーグは非常に先進的で、勝敗だけではなくポイント制を導入しています。たとえば「全員が出場したら1ポイント」「ピッチャーを2人以上交代で1ポイント」など、子どもたちを真ん中に、勝敗よりも子どもたちの成長をいかに促すかを主眼に置いています。練馬アークスも加盟して、試合をしてきました。今回PCGからご相談をいただいて、2025年度からは当方で引き継ぎ、コンセプトはそのままにリーグ名称を「INFINITY BASEBALL LEAGUE U-12」に変更してリニューアルする予定です。12月1日から加盟チームを募集し、すでに首都圏だけでなく静岡、栃木、兵庫にも広がっています。これを全国に広げていきたいです。

島本 基本的なルールは決まっているけれど、細かい事情を考慮してチーム同士でルールを相談できるのも良いですね。

齊藤 「野球を始めたばかりの子の場合は下投げでもいい」とかね。本当にやりやすかった。皆一緒に出場できるからいいよね。保護

者もベンチにいる子どもより、試合に出ている姿を見たいですね。

中桐 試合を通じた成長はものすごく大きい。トーナメント戦だと負けられない戦いが続くので、監督は勝てるメンバーを選びます。PCGはリーグ戦で、基本的には「全員出場しましょう」というレギュレーションなので、チームとしての成果より、子どもたちの成長を優先できる点が良いと思います。あとは、新リーグでは試合のマッチングの仕組みを変えました。オンラインのプラットフォームを入れたので、マッチングにかかる運営の負荷がだいぶ軽減されると思います。リーグ戦ですが総当たりではないので、好きなタイミングで好きなチームと試合が組めてフレキシブルです。

島本 運営の負荷は本当に大きかった。表には見えない部分で大変なことが多いので、システムで解決できるのは良いですね。

4. JEBCが考える保護者の役割

齋藤 ポジティブベースボールクラブでは、保護者の当番制はなし、父母会の設立は禁止しています。これも、学童野球を始める上で大事な選択肢のひとつだと考えます。保護者の手伝いがどうしても必要になる場面も多々ありますが、できるだけ私たち運営陣・指導陣でサポートをしています。

島本 私たちも父母会等はありません。任意で一緒に入って練習に参加してくれる保護者が何名かいます。保護者が自分の子を褒めるのは普通だと思いますが、うちのチームではほかの子どもにも積極的に声掛けしてくれます。その雰囲気づくりは、すごく助かっています。大人が一緒に入って練習することで子どもの見本にもなり、安心感にもつながりますし、何よりも明るくなって場が盛り上がるのが

いいですね。

齋藤 私たちも、お手伝いを申し出てくれる方にはやってもらいます。ほかのクラブに比べて、うちの保護者は見守っている人数が多いのではないかと思います。練馬アークスはどうか。

中桐 普段は、数名の保護者に練習と一緒に参加していただき、ご見学の保護者もちらほらいらっしゃいます。手伝いではなく「一緒に参加する」という定義にしています。教えるのはあくまでコーチで、教え方がぶれないように、そこだけは気を使っています。

齋藤 うちは保護者から「コーチをやりたい」と言われれば、資格の勉強をしてもらった上で、野球経験に関わらず担当してもらっています。練馬アークスは、保護者のコーチは一切いないのですか。

中桐 私たちの場合は「保護者負担ゼロ」とはっきり標榜しているので、明確に線を引いています。保護者の中には、びっくりするような野球の経歴をお持ちの方もいらっしゃいますが、スタッフと保護者は明確に分けて考えています。JIBCとしては、保護者の関わり方については、各チームのスタンスを尊重していきたい、正解はないと思います。

島本 ただ、当番制などで親御さんの負担が増えるのはどうか。

齋藤 そうですね。負担が大きすぎでは良くありません。JIBCとして、保護者向けの勉強会やコンテンツの配信もできたらいいですね。

島本 保護者のチームへの関わり方も学童野球の重要な課題のひとつですよね。どのように関わっていくのが正解なのか、運営者は迷うところではないでしょうか。

中桐 子どもと保護者の適切な関わり方や距離感については、言語化するのが極めて難

しいです。ただ、適切な距離感で関わる家庭のお子さんは、野球がうまくなるスピードが速い。言い過ぎるでもなく、無関心でもないというか。たとえば子どもが「キャッチボールしよう」と誘ったら、おそらくたくさん相手をしています。でも細かな指導まではしていないと思います。親から頭ごなしに「こうしろ」「ああしろ」と指導するのではなく、子どもが自発的にいろいろ考えてうまくなって、チームの練習で確認して、また家で親と一緒に考える、そういう関わりが理想的ではないかと思います。

齋藤 子ども自身がうまくなりたいと思って、「お父さん、練習手伝って」と自ら発信できるような家庭環境も大事です。

島本 そういう家庭の子は勝手に練習をしてうまくなりますよね。そうした環境をどう作っていくか、仕事と家庭のバランスをとりながら子どもに向き合っていくのはけっこう難しいですよ。

齋藤 難しい。仕事から疲れて帰ってきて、ゆっくりしてビールを飲みたい時なら、「あとにして」と言いがちですよ(笑)

中桐 しかも、自分が指摘したいことはちょっと我慢する。結論は、何も言わないことです。しっかり見守って、その時々で適切な情報や道具などを提供してあげる。

齋藤 一番難しいな。

中桐 難しいですね。一見遠回りにみえますからね。

5. JIBC の今後

中桐 先進的なチームが全国に広がりつつあるので、協働して活動の輪を広げ、微力ながら学童野球を少しでも持続可能なものにできるように尽力したいです。そのために、ほかの団体がやっていないような新しい施策を打

ち出して、いろいろな取り組みができればいいと思います。

齋藤 まずは JEBC 加盟チームで選抜チームを結成し、オープン大会に出場してみようと考えています。子どもたちには選抜チームで新たなスキルや可能性を発見してもらい、チームに還元してほしいです。今、エントリーを募集中です。ゆくゆくは埼玉選抜、東京選抜、神奈川選抜などがどこかのグラウンドで一堂に会して大会をするのも面白いと思います。

島本 自分のチームだけだどうしても視野が狭くなる。ほかのチームのうまい子や特徴ある子とコミュニケーションを取り、交流が増えていくと面白いですね。あとは、チーム同士で集まってキャンプをしたり、ワンデイ大会のような JEBC カップもぜひ開催してみたい。子どもたちが寝食を共にして、野球以外で交流する機会も積極的に設けたい。スポーツを通していろんな経験をして、中学、高校、その後の野球人生の礎にしてもらいたいと思います。

中桐 トーナメント戦では、全国大会まで進まなければ全国のチームと交流するのは難しいと思います。リーグ戦で来られるチームを招待すれば、勝ち上がらなくても全国のチームと交流できます。

齋藤 学童野球はどうしても勝ちを求める、大人のエゴで子どもたちを使ってしまうイメージが今も少しあると思います。もっと子どもたちのために、野球を始めやすくする取り組みのひとつとして、JEBC があると思います。

中桐 少子化が相当のペースで進んでいます。今の小学 6 年生の人口は約 100 万人ですが、昨年(2023 年)生まれた子どもは約 70 万人で、この十数年で 30 万人以上も減ってい

ます。その中で、野球人口はそれ以上の割合で減少しているわけですから、野球界が現状から変わらなければ、早晩野球をやる子どもがいなくなる危機感があります。私たちは野球が楽しいスポーツだと思っていますし、子どもの成長にとっても絶対に有意義だと信じています。同じように考えている人が全国にたくさんいることは確実なので、憂いているだけでなく行動を、「その一步を一緒にやりませんか」と伝えたいです。

島本 「やる人がいないのであれば、僕らでやろう」ですよね。幼少期、幼稚園ぐらいからボールに触れる機会を作ることで、野球に興味を持つ子が増えると思います。また、大人が教えすぎてしまって野球が嫌いになる子どもも多いと思うので、指導の仕方を変えていきたいです。

齋藤 そうですね。JEBC や新リーグでまずは楽しく野球を始められる環境を作り、「クラブやチームは子どもたちのためにある」というメッセージをどんどん発信して、ひとりでも多く野球を始める子が増える—そういう活動になればいいと思います。



3. セミナーのまとめと考察

本セミナーでは、4名の講師から多様な論点を提供いただいた。第1回の岡田氏は、日本の「お茶当番」について、親の役割や女性・男性の役割を押し付けられる状況に問題があり、海外に比べて母親自身の「自分は同調圧力を受けている」という認知が非常に高いと語った。また、複数の国における競技スポーツと生涯スポーツの関係性を整理し、日本は子どもの頃に競技主導でスポーツを始めることが多く、年齢が上がるにつれて参加者数が減少すると指摘した。両者の関係性についてさまざまなパターンを議論し、できるだけ多くの人がスポーツを楽しめる方法を考えるプロセスの重要性を強調した。

第2回の関氏は、子どものスポーツを中心的にささえる指導者や運営スタッフを、そのさらに下からささえる存在として、女子マネージャーと母親の共通項を整理した。その上で、母親の役割を女性のケア労働の観点から考察し、ケアすることへの正当な評価がなく、その価値が低く見積もられている点について問題提起した。ささえる現場で困っている人がいる場合、心理的安全性が担保された組織で、個人が声をあげられる仕組みを整備する必要がある。スポーツを「する」人、「ささえる」人の双方にとって安全で安心な場を確保し、個別具体的な考察を深める重要性を指摘した。

第3回の中桐氏には、保護者の業務負担をなくしたチーム運営の実践例を紹介いただいた。具体的には「お茶当番」や「配車(送迎当番)」を廃止し、ITの活用や外部専門家の導入により効率的な運営を実現していた。中桐氏のクラブはセミナー後も注目を集め、取材が相次ぎ、他クラブからの問い合わせも続いている。クラブ間のつながりは、2章で紹介した「ジュニア・エンジョイ・ベースボールコミュニティ(JEBC)」として結実し、保護者の関わり方の見直しにとどまらず、より多くの子どもたちに豊かな野球環境を提供するための取り組みを進めている。

第4回の島沢氏には、さまざまな価値観を持つ保護者や指導者がいる中で生じる悩みにどのように対応したらよいのか、子どもを成長させる大人のささえ方について語っていただいた。指導者が「怒らないスキル」を身につけ、何かを決める際に子どもたちに任せる「放牧」のアプローチを取るなど、子どもが自ら判断し成長できる環境を整える重要性を説いた。また、大人が自身の成育歴を振り返ることで、より適切な指導や支援が可能になると指摘した。大人も学びながら、望ましい関わり方へとスタイルを変えていく姿勢が求められている。

本稿では以上4回のセミナーから得られた知見と、これまでの調査結果をもとに、課題と検討すべき視点を示す。

子どものスポーツを「ささえる」人を守る

「ささえる」人とは指導者や専門的なスタッフ、自発的に登録して活動するボランティアなどを指すことが一般的であるが、関氏が指摘したように、子どものスポーツにおいては保護者(主に母親)がさらに裏方として「ささえる」役割を担っている。保護者は必ずしも全員が自発的に関わるわけではなく、クラブ内の慣習や人間関係に疑問を抱きながら、我慢して関わり続ける例も少なくない。

一方で、近年ではウェブサイトやSNSを活用して情報発信を行うクラブが増え、保護者が家庭の方針に合ったクラブを選ぶことが可能になりつつある。クラブにとっても、理念に共感する親子が集まりやすくなり、円滑な運営が実現できる。しかし、多数の保護者に対応する指導者は1名ないし数名に限られる場合が

多く、対応において不利な立場に置かれることもある。保護者と指導者の双方が、過度な負担や不当なクレーム、理不尽な対応によって疲弊することのない環境を整えるべきである。

具体的な対応策として、まずは保護者への情報提供が重要である。そもそも地域で取り組めるスポーツの選択肢が、保護者に十分伝わっているとは言い難い。保護者が安心して関われるよう、求められる役割や適切な関わり方、トラブル時の相談先などについても、積極的な情報提供が欠かせない。

また、指導者への情報提供も不可欠である。保護者と指導者の関係構築については複数の団体が指針を示しており、近年では共働きの増加に伴う保護者の負担軽減への言及も増加している。しかし、両者の理想的な関係性やそれを実現するための具体的な体制は、クラブの種目や競技レベル、子どもの年齢や地域性などによって異なり、一律には定められない。2章で取材したクラブは、保護者の当番を廃止した点では共通しているが、関与の程度には明確な違いがみられる。保護者がほとんど来ないクラブもあれば、多くが見学を訪れるクラブ、活動を補助するクラブも存在する。指導者が自らのクラブに適した運営方法をみつけられるよう、多様な取り組み事例を共有し、参考にできる仕組みを整える必要がある。

誰が子どものスポーツをささえるのか

9年間の調査を通じて、母親たちから特によく聞かれたのは、「学校でやるスポーツ(筆者注:小学校のグラウンドを利用する地域クラブ)は強い子しか入れない」「親の負担が大きくて前向きに検討できない」という声であった。地域クラブは理念として初心者を含む幅広い層を対象にしているが、実際にはクラブや団体ごとに方針が異なり、初心者が参加しやすい環境がどの程度整備されているかは一概にはいえない。

また、政策や各種事業では、保護者は子どもに運動・スポーツの重要性を伝え、一緒に体を動かす役割が期待されている。しかし、「ささえる」過程で生じる負担を具体的に把握し、その軽減策を講じる取り組みは十分とはいえない。保護者のボランティアで成り立つクラブの意義を認めながらも、参加しづらい家庭が存在する現実を踏まえ、「誰もが平等に当番をする」という従来の枠組みからの転換が望まれる。

こうした課題は、単に家庭のニーズにこたえるだけでなく、地域のスポーツを子どもたちにとってどのような場としてデザインするかという根本的な問いにつながる。困窮家庭や障害のある子ども、外国につながる子どもを含め、誰もが参加できる場を目指すのか。それとも、親子ともに十分に関われる家庭を前提とするのか。ヒアリングでは、多様な子どもたちを受け入れた結果、特定の保護者に負担が集中し疲弊してしまう事例もみられた。少子化や家庭の多様化、格差の顕在化などの社会変化に、地域スポーツは対応できているのだろうか。まずは民間や学校も含め、どの機関がどのようなスポーツの機会を保証するのか、全体のデザインを議論し、「ささえる」人材の必要な規模や配分を検討する必要があるだろう。

誰が子どものスポーツをささえるのか—その答えは一律ではなく、地域の実情に応じた柔軟な対応が求められる。学校の部活動が教員の労働時間の限界を抱えて地域へ移行する中で、地域のボランティアや家庭の労力も無限ではない。人口集中が進む都市部と人口減少が続く地域とでは、課題も異なる。限られた人的資源を少しでも子どものスポーツに投じられるよう、インセンティブや柔軟な参加スタイルの導入による人材の確保、民間企業など多様な支援基盤の形成、団体間の連携強化を通じて、持続可能な「ささえる」体制を構築することが重要である。

参考文献

笹川スポーツ財団,2017,『2017 年度調査報告書 小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究』,笹川スポーツ財団.

笹川スポーツ財団,2022,『2022 年度調査報告書 小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究(2021)』,笹川スポーツ財団.

宮本幸子,2023,「子どものスポーツ活動をめぐる母親たちの社会関係資本—なぜ母親たちは「周辺の役割」を担い続けるのか—」,『スポーツ社会学研究』31(1),pp.71-82.

宮本幸子,2023,「母親がささえる子どものスポーツ—実態と研究課題—」,『年報体育社会学』4,pp23-33.

2023-2024 シリーズセミナー
誰が子どものスポーツをささえるのか？

2025 年 2 月発行

発行者 公益財団法人 笹川スポーツ財団

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル 3 階

TEL 03-6229-5300 FAX 03-6229-5340

E-mail info@ssf.or.jp URL <https://www.ssf.or.jp/>

無断転載、複製および転訳載を禁止します。引用の際は本書が出典であることを明記してください。

本事業は、ポートルースの交付金による日本財団の助成金を受けて実施しました。

